

第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査

概要報告

2025



令和8年3月
茅ヶ崎市

第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査 概要報告

2025

目次

1. 茅ヶ崎市自然環境評価調査ってなに？	
1.1 茅ヶ崎市自然環境評価調査の始まり	1
1.2 これまでの調査の経緯	2
1.3 これまでの調査の主な成果	4
2. 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果	
2.1 調査の目的	5
2.2 実施体制	5
2.3 調査方法	6
2.4 調査結果	9
3. 調査地区の変化と評価の概要	
3.1 指標種の確認状況の変化	15
3.2 特に重要度の高い自然環境を有する地域の変化	17
4. 『茅ヶ崎市レッドリスト2017』の一部見直し	
4.1 茅ヶ崎市版レッドリストの目的	38
4.2 レッドリストの定義	38
4.3 茅ヶ崎市レッドリスト2017からの変更点	39
4.4 茅ヶ崎市レッドリスト(見直し後)	41
5. まとめ	
5.1 第4回調査からみえてきたこと	43
5.2 第4回調査結果をふまえた今後の活用	44
5.3 第5回自然環境評価調査に向けて	45
6. 調査協力一覧	46

1 茅ヶ崎市自然環境評価調査ってなに？

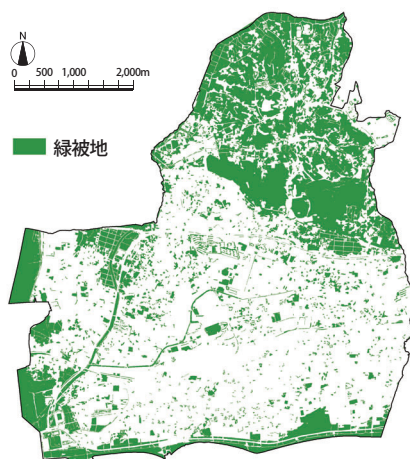
1.1 茅ヶ崎市自然環境評価調査の始まり

茅ヶ崎市には、海岸に沿った砂浜や砂防林、北部丘陵の谷戸等、多様な自然が残されています。これらの自然の多くは、全国的に見れば必ずしも珍しいものではありませんが、市民にとって身近に存在し、また、昔から人々の生活と密接に関わって維持されてきた親しみやすい自然です。

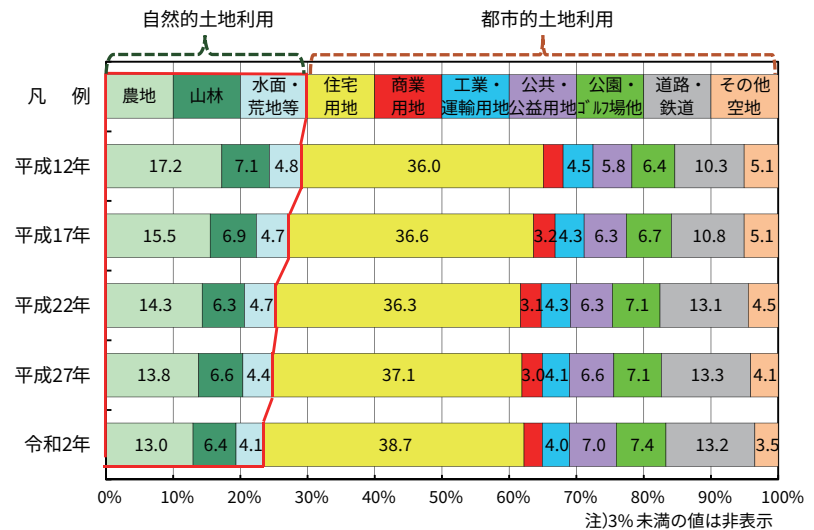
それぞれの環境に適した生物種が生息・生育し、互いに複雑に関わりあって豊かな自然が成り立っています。

一方で、谷戸の埋め立て、農地の転用や維持管理の過不足等により、自然の量が減少するとともに自然の質も低下してきています。

緑被地の分布(令和7年)



土地利用の動向(都市計画区域)



出典/令和4年度茅ヶ崎市都市計画基礎調査解析業務報告書

私たちの暮らしは自然から非常に多くの恵みを受けており、自然の保全は重要な課題であることから、身近な足元の”茅ヶ崎の自然”を適切に保全し、再生を図っていく基礎資料を得ることを目的に、平成15年度から自然環境評価調査をスタートしました。

また、調査を通じて、市民参加型のモニタリングの仕組みを構築することを目指しました。

1.2 これまでの調査の経緯

茅ヶ崎市自然環境評価調査は概ね5年間隔で実施されており、今回で4回目になります。

調査の主な内容は、市内に生息・生育する哺乳類、鳥類、両生類・は虫類、魚類、昆虫類、植物の中から「指標種」を選定し、各調査地区においてそれぞれ指標種の生息・生育状況を確認することです。

本調査の「指標種」とは『茅ヶ崎らしい自然に生息・生育する代表的な種』であり、自然環境の保全を具体的に進めるための基準となる“ものさし”を作るために選定された生きものです。

「茅ヶ崎らしい自然」を構成する代表的な環境としては、北部では斜面林や細流で構成される谷戸、南部では砂浜やクロマツの砂防林のある海岸、そして相模川、小出川、千ノ川、駒寄川の4つの河川が挙げられます。

これらの環境を更に細分化すると「樹林」「草地」「水辺」「海岸」の4つの環境によって構成されていると言えます。

「樹林」「草地」「水辺」「海岸」の4つの環境ごとに指標種を選定し、調査地区ごとに指標種の生息・生育の有無を調査しました。また、これら陸域を対象とした調査と別に、水域についても水中に生息する魚類、甲殻類、貝類を対象とした指標種調査を行い、その生息状況を確認しました。

第1回調査では、市内全域を調査して、特に重要度の高い自然環境を有する地域（コアマップ対象地区）を抽出しました。

第2回及び第3回調査では、第1回調査の結果をふまえ、コアマップ対象地区に加え比較的良好な自然環境が残されている地区を対象とした陸域の調査と、主要河川や主要河川に注ぎ込む水田用水路や細流を対象とした水域の調査を実施し、第1回調査からの変化を整理・考察しました。

第4回調査では、第3回調査の方法を踏襲して再調査を行い、第3回調査からの変化を整理・考察しています。

自然環境の「ものさし」

自然環境評価調査では、調査地区を1つの単位として、調査を通して発見された指標種の生息・生育状況の位置を記録し、一定の方法で評価した地図「自然環境評価マップ」を作り上げます。これは生物多様性という観点に立った場合、相対的にどの地域の重要度が高いかを示すことができる、地域の自然の評価基準となります。

このことから「自然環境評価マップ」は市の自然環境を適切に保全・再生していく上で、基本的な「ものさし」と言えるものです。

また、もう一つの「ものさし」として、市域で絶滅した種およびそのおそれが高い種をリストアップした「レッドリスト」があります。

レッドリストは生物の種を1つの単位として、自然環境の重要性を測る「ものさし」となるものです。

1 茅ヶ崎市自然環境評価調査ってなに？

これまでの調査のあゆみ

第1回調査

茅ヶ崎市自然環境評価調査(平成15年度～平成17年度)

- 茅ヶ崎市らしい自然に生息・生育する代表的な種を指標種として選定
→市内全域を76地区に区分して、指標種の生息・生育状況を調査
→調査結果を基に、特に重要度の高い自然環境を有する地域(コアマップ対象地区)を抽出
- 茅ヶ崎市版レッドデータリストの作成
- 市民モニターによる身近な生き物調べ

市の施策
に活用

第2回調査

茅ヶ崎市自然環境評価再調査(平成22年度～平成24年度)

- 第1回調査で抽出されたコアマップ対象地区を中心に再調査
→第1回調査からの変化を整理・考察
→調査の課題を把握し、調査方法や調査範囲を見直し
- 自然環境評価調査の体験会開催
→継続的な自然環境評価調査実施に向けた体制づくり

市の施策
に活用

第3回調査

第3回茅ヶ崎市自然環境評価調査(平成27年度～平成29年度)

- 調査方法や調査範囲を見直し、コアマップ対象地区を中心に再調査
→第1回調査からの変化を整理・考察
- 茅ヶ崎市版レッドデータリストの改訂
(茅ヶ崎市レッドデータリスト2017の作成)

市の施策
に活用

第4回調査

第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査(令和5年度～令和7年度)

- 第3回調査の調査方法や調査範囲を踏襲し、コアマップ対象地区を中心に再調査
→第3回調査からの変化を整理・考察
- 茅ヶ崎市レッドデータリスト2017の一部見直し

市の施策
に活用予定

1.3 これまでの調査の主な成果

第1回～第3回調査から得られた成果は、茅ヶ崎市の施策に活かされています。

主な成果①指標種分布状況の把握

茅ヶ崎らしい自然に生息・生育する代表的な種である指標種が、生息・生育する場所が明らかとなりました。

-参考-

第1回から第3回の自然環境評価調査の結果を、茅ヶ崎市ホームページ「まっぷdeちがさき」で見ることができます。（盗掘・採集等のおそれ大きい種を除きます。）

掲載マップ一覧のうち、「自然・観光情報」の中から選んでください。

<https://www2.wagmap.jp/chigasaki/Portal>



主な成果②重要度の高い自然環境の抽出

地域の専門家や市民団体等と市とが協働して、だれもが客観的に理解できる分かりやすい「ものさし（＝自然環境評価マップ）」をつくり、茅ヶ崎らしい重要な自然がどこにあるのか評価した結果、やなぎやと 柳谷、なめがや 行谷、しみずやと 清水谷、ながやと 長谷、あかほねじゅうさんず 赤羽根十三図、へいだゆうしんでん 平太夫新田、やなぎしま 柳島の7地区が特に重要度の高い自然環境を有する地域であることがわかりました。

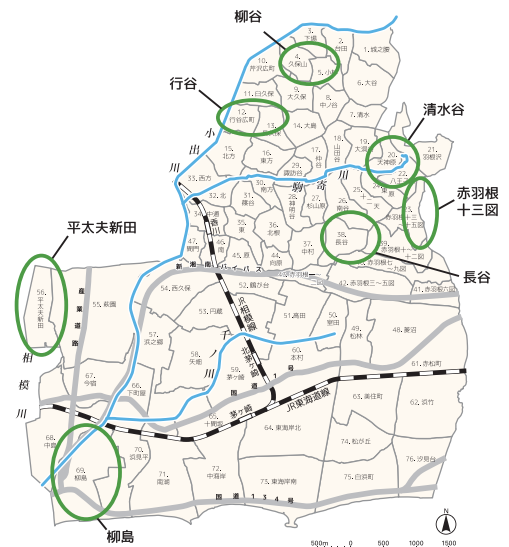
主な成果③施策への活用

これまでの調査で集めたデータは、市内の自然環境の状態や変化を把握し、茅ヶ崎らしい自然環境をどのように保全していくべきかを考えるための大切な基礎資料となります。

調査結果を活かした具体的な取り組み

- ・「茅ヶ崎市みどりの基本計画 生物多様性ちがさき戦略」、
「茅ヶ崎市環境基本計画（2021年版）」等を策定し、調査結果を進捗管理の指標としています。
- ・特別緑地保全地区の指定（清水谷、赤羽根字十三図周辺）
- ・減少傾向が明らかで保全の必要がある生きものをまとめたレッドリストの作成
- ・開発行為等に伴うミティゲーション※の実施等

※ミティゲーション：開発行為や公共事業等による地域の生態系や自然環境への悪影響を、回避もしくは緩和するための措置です。



○：特に重要度の高い自然環境を有する地域

主な成果④市民参加型のモニタリングの仕組みを構築

地域の専門家や市民・市民団体等と市が協働し、自然環境評価マップを作る過程を通して、市民参加型のモニタリングの仕組みを構築しました。

また、継続的な調査実施に向け、調査に協力していただける市民等を養成する一歩として、座学・フィールドワークからなる調査員養成講座、フィールドワークを主とする自然環境調査体験会を開催しました。調査員の養成には時間を要することから、引き続き、調査員養成講座等の取り組みを実施していきます。

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

2.1 調査の目的

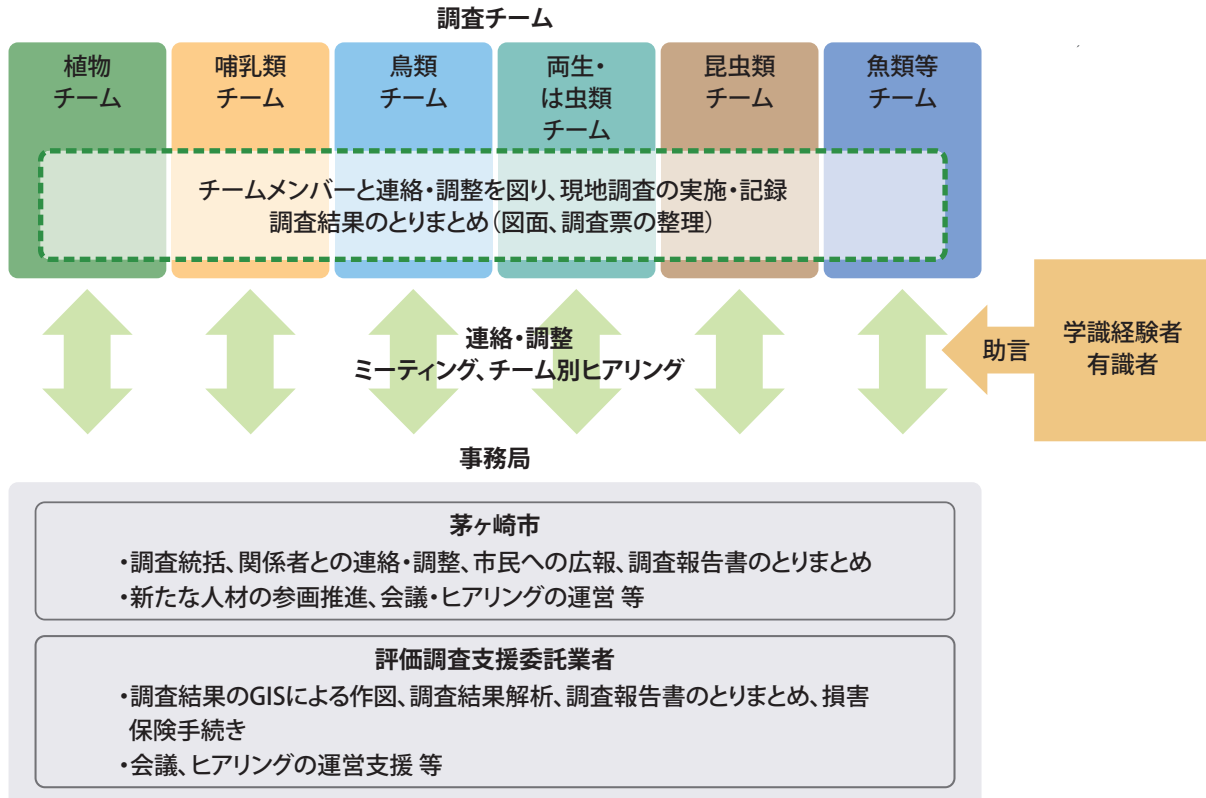
茅ヶ崎市自然環境評価調査は、市内のどこに豊かな自然があるか、あるいは特徴的な自然があるかを明らかにするとともに、その結果を、市内の自然を保全・再生するための基礎資料にすることを目的として実施してきました。

第4回調査では、特に重要度の高い自然環境を有する地域等の最新の状況を確認し、第3回調査との結果を比較してその変化を把握するとともに、自然環境の保全・活用施策に繋げることを目的として実施しました。

2.2 実施体制

これまでの茅ヶ崎市自然環境評価調査は、地域の専門家、調査経験者、新規調査参加者（調査員養成講座参加者を含む）、市民団体等の協力により分類群ごとに編成した調査チームと、学識経験者や有識者、茅ヶ崎市が協働して実施しました。

第4回調査では、第3回調査と同様に、本調査の中心的役割を担う場として「調査ミーティング」を設置し、学識経験者及び有識者、各チームのリーダー・サブリーダー、事務局が出席して、本調査の調査計画の検討、実施体制、調査結果のとりまとめについて議論し、合意形成を図りました。また「チーム別ヒアリング」では、調査に先立って調査方法の説明や意見交換、メンバーの交流を行いました。



2.3 調査方法

陸域の指標種調査

(1) 調査地区（モニタリングエリア）

陸域の調査範囲は、第1回調査で抽出された重要度の高い自然環境を有する地域（=コアマップ対象地区）である柳谷、行谷、清水谷、長谷、赤羽根十三区、平太夫新田、柳島の7地区に加え、比較的良好的な自然環境が残されている城之腰と汐見台を加えた9地区をモニタリングエリアとしました。

(2) 調査対象種

茅ヶ崎らしい自然に生息・生育する代表的な種の中から「樹林」「草地」「水辺」「海岸」の4つの環境区分ごとに調査対象となる指標種を選定しました。

対象の分類群は、哺乳類、鳥類、両生・は虫類、昆虫類、魚類、植物の6つです。

（詳細は8ページ参照）

(3) 調査方法

モニタリングエリアごとに指標種の生息・生育の有無を確認し、地図にその位置、種名、個体数等を記録しました。概ね20～25m以上離れた地点で同一種を確認した場合には別の確認情報として記録しました。

詳細な調査方法については、分類群ごとに決めた調査ルールに基づき実施しました。

(4) 調査期間

令和6年1月～令和7年10月
（実施時期は分類群により異なります）



モニタリングエリア位置図

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

水域の指標種調査

(1) 調査地点

主要河川の13地点及び主要河川に注ぎ込む水田用水路や細流の8地点、計21地点を調査地点としました。なお、指標種の確認状況と季節的な変化の両方に注目して確認できるように、調査地点を重要な箇所に絞り、第3回調査の地点数から一部の地点を統合しました。

(2) 調査対象種

茅ヶ崎らしい自然に生息する代表的な種として水辺、主要河川、細流指標種を選定しました。

対象の分類群は、魚類、甲殻類、貝類の3つです。

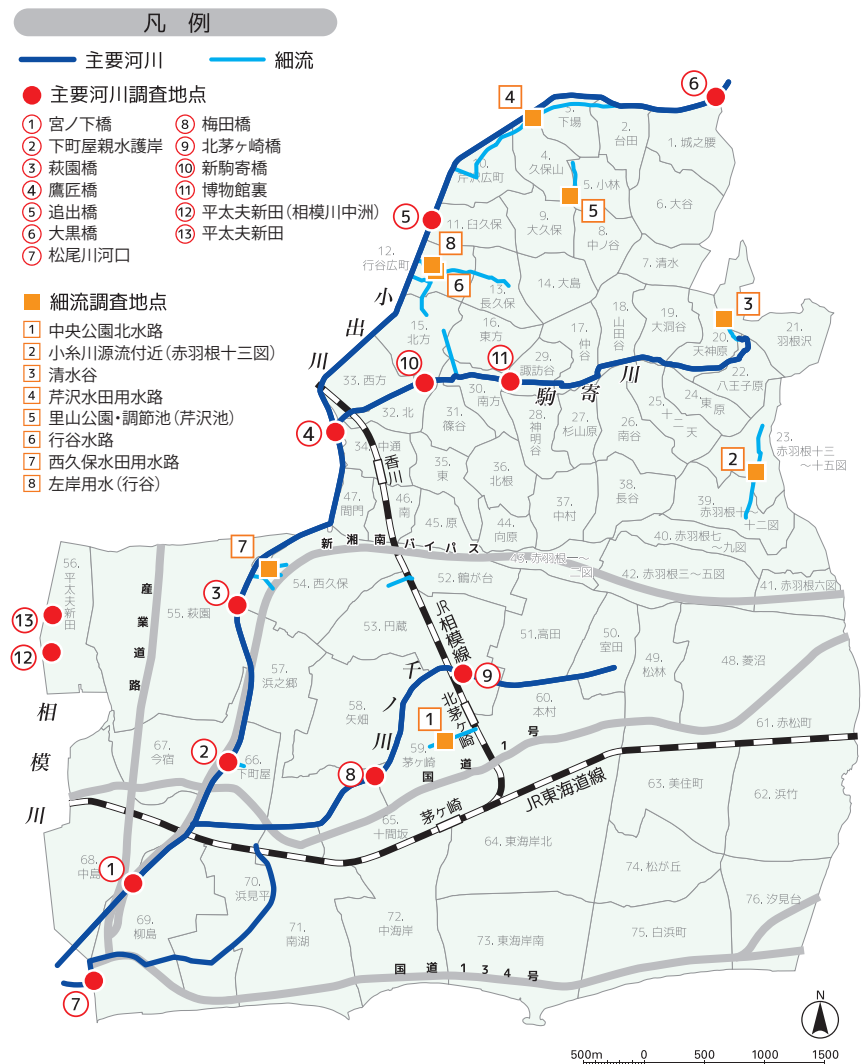
(詳細は8ページ参照)

(3) 調査方法

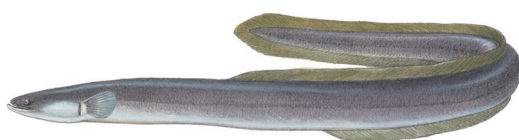
さで網、タモ網、投網等を用いて捕獲し、その種名、個体数等を記録しました。

(4) 調査期間

令和6年4月～令和7年10月



水域調査地点位置図



ニホンウナギ

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

〈指標種リスト〉

陸域

樹林指標種	
植物	アカガシ、ウラシマソウ、エビネ、オオハナワラビ、カマツカ、コクラシ、セントウソウ、ダイコンソウ、ツクバトリカブト、トウゲシバ、ヒトリシズカ、マルバスマシ、ヤマコウバシ、ヤマユリ
鳥類	アオゲラ、アオバズク、ウグイス、エナガ、オオタカ、カケス、サシバ、シロハラ、ノスリ、フクロウ、ヤマガラ、ルリビタキ
両生・は虫類	[両生類] アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル [は虫類] ニホンマムシ、ニホンヤモリ
昆虫類	ウスタバガ、ウラゴマダラシジミ、エゾカタビロオサムシ、クツウムシ、クロカナブン、コマダラウスバカゲロウ（幼虫）、ゴマダラチョウ、センノキカミキリ、トゲナナフシ、ニホントビナナフシ、ヒオドシチョウ、ヒメマイマイカブリ、ムネアカセンチコガネ、ヤマトタマムシ、ヨツズジハナカミキリ

草地指標種	
植物	アキノトウグサ、カナビキソウ、クサボケ、コウヤワラビ、ツリガネニンジン、ナンバンギセル、ノアザミ、ヒキヨモギ、ヒトツバハギ、フユノハナワラビ、ホタルブクロ、ワレモコウ
哺乳類	カヤネズミ
鳥類	コミミズク、セッカ、チョウゲンボウ、ハヤブサ、ヒバリ、ホオジロ、モズ
両生・は虫類	[は虫類] アオダイショウ、シマヘビ、ヒガシニホントカゲ、ヤマカガシ
昆虫類	オナガササキリ、ギンイチモンジセセリ、キンヒバリ、クルマバタ、コバネササキリ、シブイロカヤキリ、ジャコウアゲハ、ジャノメチョウ、ショウリョウバッタモドキ、シロヘリツチカメムシ、スズムシ、ナキイナゴ、ヒガシキリギリス、ヒゲコガネ、マツムシ、マメハンミョウ

水辺指標種	
植物	イノモトソウ、オモダカ、カワデジャ、チゴザサ、チダケサシ、ニョイスミレ、ツリフネソウ、ボントクタデ、マコモ、ミゾコウジュ、ヤナギタデ、ヤノネグサ
鳥類	アオサギ、アマサギ、イカルチドリ、オオジュリン、オオヨシキリ、カイツブリ、カシラダカ、クイナ、ゴイサギ、コサギ、コチドリ、ダイサギ、タゲリ、タシギ、チュウサギ、バン、ヒドリガモ、ホシハジロ、ミサゴ、ヨシゴイ
両生・は虫類	[両生類] トウキョウダルマガエル、ニホンアカガエル [は虫類] ニホンイシガメ、ヒバカリ
昆虫類	オニヤンマ（幼虫）、カトリヤンマ、ケラ、コオナガミズスマシ、シオヤトンボ、シマアメンボ、タイコウチ、ネグロセンブリ、ヒメアカネ、ヘイケボタル、ミヤマアカネ、ミルンヤンマ、ムスジイトトンボ、モノサシトンボ
魚類	アブラハヤ、ドジョウ、ナマズ、ホトケドジョウ

海岸指標種	
植物	イヌハギ、オカヒジキ、オニシバ、ケカモノハシ、コウボウシバ、コウボウムギ、ハマエンドウ、ハマニガナ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ビロードテンツキ、マルバアカザ
鳥類	キョウジョシギ、ミユビシギ
昆虫類	オサムシモドキ、クロマメゾウムシ、シロスジコガネ、ハマベエンマムシ類、ルリエンマムシ

水域

主要河川指標種	
魚類	アブラハヤ、アユ、ウキゴリ、ウグイ、シマヨシノボリ、 <u>クロダハゼ</u> 、ドジョウ、ナマズ、ニゴイ、ニホンウナギ、ヌマチチブ
甲殻類	テナガエビ、ヌカエビ、ヒラテテナガエビ、ミゾレヌマエビ、モクスガニ

細流指標種	
魚類	アブラハヤ、ドジョウ、ナマズ、ホトケドジョウ
甲殻類	サワガニ、ヒラテテナガエビ、モクスガニ
貝類	カワニナ、マルタニシ

備考 1) 下線は、第4回調査で追加された種である。

- 第3回調査で指標種であったピンズイ（鳥類：海岸指標種）、クサガメ（は虫類：水辺指標種）、トウヨシノボリ（魚類：主要河川指標種）、タモロコ（魚類：主要河川指標種）、ヒメタニシ（貝類：細流指標種）は第4回調査で指標種から除外した。
- 第3回調査で海岸指標種であったハマカキラン（植物）は丘陵地～山地に分布するエゾスズランと同一種であることが判明し、指標種から除外した。
- 第3回調査で樹林指標種であったイノモトソウ（植物）及びツリフネソウ（植物）は、水辺指標種に、草地指標種であったマルバスマシ（植物）は樹林指標種にそれぞれ第4回調査で変更した。
- ミヤマアカネ（昆虫類）は第1回調査で指標種としていたが、記録が途絶えたため指標種外としていた。近年再び記録されるようになったため、第4回調査では指標種とした。
- 第3回調査で確認されているドジョウ（魚類）は、在来のドジョウ（在来系統）と外来のドジョウ（大陸系統）が区別されていない。第4回調査では、ドジョウ（大陸系統）の個体は外来種として除外した。

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

2.4 調査結果

(1) 樹林指標種の確認状況

樹林指標種は、柳谷と清水谷で多く確認されました。柳谷や清水谷では、谷戸の斜面林がまとまって存在していることがその理由と考えられます。

分類群	種名	エリア									確認 エリア数
		柳谷	行谷	清水谷	長谷	赤羽根 十三区	平太夫 新田	柳島	城之腰	汐見台	
植物	アカガシ	●	●	★		●			●		5
	ウラシマソウ	●	●	●	★	●		●	●		7
	エビネ	●	●	●	●						4
	オオハナワラビ	●	●	●	○	●	●		●		6
	カマツカ	●	●	●	●	●			●		6
	コクラシ	●		●							2
	セントウソウ	●				●					2
	ダイコンソウ	○		●		●			●		3
	ツクバトリカブト	●	●	●					●		4
	トウゲシバ	○									0
	ヒトリシズカ	●	★	●	○				●		4
	マルバスマシ※1	●	●	●		○			●		4
	ヤマコウバシ	●		●	○						2
	ヤマユリ	●	●	●	●	○			●		5
鳥類	アオゲラ	●	●	●	★	★	★		○		6
	アオバスク										0
	ウグイス	●	●	●	●	●	●	●	●	○	8
	エナガ	●	●	●	●	●		●	○	★	7
	オオタカ	○	●	●	●	○			○		3
	カケス	○	○				○				0
	サンバ										0
	シロハラ	●	●	●	●	●	○	○	●	○	6
	ノスリ	○	○	●		★	○				2
	フクロウ	★				★					2
	ヤマガラ	●	●	●	●	●			●		6
ルリビタキ	○		●							1	
両生・ は虫類	アズマヒキガエル	●		●			★		★	★	5
	シュレーゲルアオガエル	●	●	●							3
	ニホンマムシ	★	★								2
	ニホンヤモリ	●				★					2
昆虫類	ウスタビガ	●									1
	ウラゴマダラシジミ										0
	エゾカタビロオサムシ	★							★		2
	クツフムシ	●		○	●	●				●	4
	クロカナブン	●	○	●	○	●		★		★	5
	コマダラウスバカゲロウ(幼虫)					※2					0
	ゴマダラチョウ	●	●	●	●	●	●	○	●		7
	センノキカミキリ	●	○	○			○		●		2
	トゲナナフシ	●	★	○	●	★			★		5
	ニホントビナナフシ	●	★	●							3
	ヒオドシチョウ	★	★	●	○						3
	ヒメマイマイカブリ	★	○				★		★		3
	ムネアカセンチコガネ										0
	ヤマトタマムシ	●	●	●	●	★	●		●		7
ヨツスジハナカミキリ	★	○	★							2	
第4回調査の確認種数(種)	34	22	28	14	19	7	4	19	4		
第3回調査の確認種数(種)	34	23	29	17	16	8	5	18	3		

備考 ※1:第4回調査で、マルバスマシは草地指標種から樹林指標種に変更した。 ●:第3回調査と第4回調査で確認された種
 ※2:コマダラウスバカゲロウの成虫が確認されている。 ★:第3回調査では確認されていないが、第4回調査で確認された種
 ○:第3回調査で確認されたが、第4回調査では確認されなかった種

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

(2) 草地指標種の確認状況

草地指標種が最も多く確認されたのは行谷で、柳谷、赤羽根十三図でも多く確認されました。行谷には谷戸田周辺や小出川の氾濫原、柳谷には谷戸底や谷戸の外周の道路沿い等にまとまりのある草地が見られます。このような環境が草地指標種にとって良好な生息・生育環境になっていると考えられます。

分類群	種名	エリア									確認 エリア数
		柳谷	行谷	清水谷	長谷	赤羽根 十三図	平太夫 新田	柳島	城之腰	汐見台	
植物	アリトウグサ				○						0
	カナビキソウ				○						0
	クサボケ	●	●	○					●		3
	コウヤワラビ	●	●	●	●	●			○		5
	ツリガネニンジン	●	●	○		●			●		4
	ナンバンギセル	●	●	●	○				○		3
	ノアザミ	○	●		●	●	★		●		5
	ヒキヨモギ				○						0
	ヒトツバハギ			●		●					2
	フユノハナワラビ	●	★	○	●	●			●		5
	ホタルブクロ	●	●	○	●	●			●		5
	ワレモコウ	●	●	●	○	●			●		5
哺乳類	カヤネズミ	●	●	∖	∖	∖	○※1	∖	∖	∖	2
鳥類	コムミズク										0
	セッカ		●				★				2
	チョウゲンボウ	○	○	●	○	★	○	●	★		4
	ハヤブサ		★								1
	ヒバリ		○					★			1
	ホオジロ	○	●	●	●	●	●	●	●	●	8
	モズ	●	●	●	○	●	●	●	●		7
両生・ は虫類	アオダイショウ	★	●	●		○					3
シマヘビ	○		○			★					1
ヒガシニホントカゲ	●		●	●	★		●		★		6
ヤマカガシ	●	●	●								3
昆虫類	オナガササキリ	●	★			★		★	★	★	6
	ギンイチモンジセセリ	○	●								1
	キンヒバリ	●	●	●		●	●		●		6
	クルマバッタ				○						0
	コバネササキリ		●								1
	シブイロカヤキリ	●	●		●	●	★		●		6
	ジャコウアゲハ				●	●	●	★	○		4
	ジャノメチョウ										0
	ショウリヨウバッタモドキ	●	★	★	●			★	●		6
	シロヘリツチカメムシ										0
	スズムシ	○	●		●	●	●	★		★	6
	ナキイナゴ				○						0
	ヒガシキリギリス						●	●		○	2
	ヒゲコガネ										0
	マツムシ		●				●	●			3
マメハンミョウ		●	★					●		3	
第4回調査の確認種数(種)		16	24	13	10	16	11	11	14	4	
第3回調査の確認種数(種)		21	22	16	19	14	9	6	15	2	

備考 ※1:平太夫新田では、調査範囲外でカヤネズミの球巣が確認されている。
 ∖:清水谷、長谷、赤羽根十三図、柳島、城之腰、汐見台は哺乳類の調査地点には設定されていない。
 ●:第3回調査と第4回調査で確認された種
 ★:第3回調査では確認されていないが、第4回調査で確認された種
 ○:第3回調査で確認されたが、第4回調査では確認されなかった種

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

(3) 水辺指標種の確認状況

水辺指標種が最も多く確認されたのは行谷で、次いで多かったのは柳谷、清水谷でした。いずれの調査地区も、谷戸底に細流、オギ・ヨシ原等からなるまとまった湿地環境が存在しており、そのような環境が水辺指標種にとって良好な生息・生育環境になっていると考えられます。

(1/2)

分類群	種名	エリア									確認 エリア数
		柳谷	行谷	清水谷	長谷	赤羽根 十三区	平太夫 新田	柳島	城之腰	汐見台	
植物	イノモトソウ※1	●	★	●	○	★			★		5
	オモダカ	●	●						★		3
	カワチシャ	★	●				●				3
	チゴザサ	●	●	○							2
	チダケサシ		○	●		●			●		3
	ニヨイスミレ	●	○	●		●					3
	ツリフネソウ※1		●	●							2
	ボントクタデ		●	●		●					3
	マコモ		●								1
	ミゾコウジュ			●			★				2
	ヤナギタデ	●	●	●			●				4
	ヤノネグサ		●								1
	鳥類	アオサギ	●	●	○			●	★	○	●
アマサギ											0
イカルチドリ			★								1
オオジュリン			★								1
オオヨシキリ			●				★				2
カイツブリ		●									1
カシラダカ		●	●	○		○	○				2
クイナ											0
ゴイサギ											0
コサギ		○	●	○		○	●	★	○		3
コチドリ			●				○	●	○		2
ダイサギ		○	●				●			★	3
タゲリ											0
タシギ			●								1
チュウサギ			○								0
バン											0
ヒドリガモ			○				○	●			1
ホシハジロ		○						★			1
ミサゴ							●	○		★	2
ヨシゴイ											0
両生・ は虫類 ※2	トウキョウダルマガエル										0
	ニホンアカガエル	●	○	●		★					3
	ニホンイシガメ										0
	ヒバカリ	●	★	●		★	○				4
昆虫類	オニヤンマ(幼虫)	●	●	●		●			●		5
	カトリヤンマ	●	●	★	★	●					5
	ケラ	●	●	●	★	★		●	●		7
	コオナガミズスマシ										0
	シオヤトンボ	●	●	○	★	○					3
	シマアメンボ	●	●	●		●					4
	タイコウチ										0
	ネグロセンブリ										0
	ヒメアカネ					○					0
	ヘイケボタル	●									1
	ミヤマアカネ※3					★					1
	ミルンヤンマ										0
	ムスジイトトンボ										0
モノサシトンボ			○							0	

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

(2/2)

分類群	種名	エリア									確認 エリア数
		柳谷	行谷	清水谷	長谷	赤羽根 十三区	平太夫 新田	柳島	城之腰	汐見台	
魚類	アブラハヤ				\			\	\	\	0
	ドジョウ※4		○		\			\	\	\	0
	ナマズ		○		\			\	\	\	0
	ホトケドジョウ				\	●		\	\	\	1
第4回調査の確認種数(種)		17	24	13	3	12	8	6	5	3	
第3回調査の確認種数(種)		19	27	18	1	11	10	4	6	1	

備考 ※1: 第4回調査で、イノモトソウ及びツリフネソウは樹林指標種から水辺指標種に変更した。
 ※2: 第3回調査で水辺指標種とされていたクサガメは、外来種であるため第4回調査では指標種外とした。
 ※3: ミヤマアカネは第1回調査で指標種としていたが、記録が途絶えたため指標種外としていた。近年再び記録されるようになったため、第4回調査で指標種とした。
 ※4: 第3回調査で確認されているドジョウは、在来のドジョウ(在来系統)と外来のドジョウ(大陸系統)が区別されていない。第4回調査で、ドジョウ(大陸系統)は外来種として除外した。
 \: 水辺指標種のうち、長谷、柳島、城之腰、汐見台は、水域の調査地点が設定されていない。
 ●: 第3回調査と第4回調査で確認された種 ★: 第3回調査では確認されていないが、第4回調査で確認された種
 ○: 第3回調査で確認されたが、第4回調査では確認されなかった種

(4) 海岸指標種の確認状況

海岸指標種は、調査地区に設定した柳島、汐見台の2地区で確認されました。いずれの調査地区も、湘南海岸に沿って砂浜上にコウボウムギ、ハマヒルガオ等の海浜性植物群落が点在しており、帯状に伸びる砂浜環境が海岸指標種の生息・生育環境になっていると判断されます。その内陸側には帯状の砂防林が見られます。もともとはクロマツのみが植林されていましたが、近年になってウバメガシやスダジイ等の常緑広葉樹が植栽されるようになり、広葉樹林化が進行しています。

分類群	種名	エリア									確認 エリア数
		柳谷	行谷	清水谷	長谷	赤羽根 十三区	平太夫 新田	柳島	城之腰	汐見台	
植物 ※1	イヌハギ	\	\	\	\	\	\		\	●	1
	オカヒジキ	\	\	\	\	\	\	○	\	●	1
	オニシバ	\	\	\	\	\	\	★	\	●	2
	ケカモノハシ	\	\	\	\	\	\	★	\	●	2
	コウボウシバ	\	\	\	\	\	\	●	\	●	2
	コウボウムギ	\	\	\	\	\	\	●	\	●	2
	ハマエンドウ	\	\	\	\	\	\	●	\	●	2
	ハマニガナ	\	\	\	\	\	\		\	●	1
	ハマヒルガオ	\	\	\	\	\	\	●	\	●	2
	ハマボウフウ	\	\	\	\	\	\	○	\	○	0
	ピロードテンツキ	\	\	\	\	\	\		\		0
	マルバアカザ	\	\	\	\	\	\	○	\	●	1
	鳥類 ※2	キョウジョシギ※3	\	\	\	\	\	\	★	\	
ミユビシギ		\	\	\	\	\	\		\		0
昆虫類	オサムシモドキ	\	\	\	\	\	\	○	\	○	0
	クロマメゾウムシ	\	\	\	\	\	\	●	\	●	2
	シロスジコガネ	\	\	\	\	\	\	○	\	●	1
	ハマベエンマムシ類	\	\	\	\	\	\	●	\	★	2
	ルリエンマムシ	\	\	\	\	\	\		\		0
第4回調査の確認種数(種)		0	0	0	0	0	0	9	0	13	
第3回調査の確認種数(種)		0	0	0	0	0	0	11	0	14	

備考 ※1: 第3回調査までハマカキランが海岸指標種の位置付けであったが、近年の研究により丘陵地～山地に分布するエソズランと同一種であることが分かり、第4回調査では指標種外とした。
 ※2: 第3回調査までピンズイは海岸指標種の位置付けとなっていたが、樹林地にも生息するため第4回調査で指標種外とした。
 ※3: 第4回調査で、海岸指標種にキョウジョシギを追加した。
 \: 柳谷、行谷、清水谷、長谷、赤羽根十三区、平太夫新田、城之腰は、海岸指標種の調査対象エリア外である。
 ●: 第3回調査と第4回調査で確認された種 ★: 第3回調査では確認されていないが、第4回調査で確認された種
 ○: 第3回調査で確認されたが、第4回調査では確認されなかった種

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

(5) 主要河川指標種の確認状況

河川の指標種は、その生活様式により、一生を淡水域で生活する種類（淡水性）と、川と海とを行き来して生活する種類（通し回遊性）に分けられます。今回の調査では、淡水性の種類に比べ、通し回遊性の種類が多く調査地点で確認されました。

淡水性の指標種は、小出川（追出橋）と駒寄川（博物館横）で多く確認されました。追出橋付近の小出川は比較的水深が深く、水草の群落が発達していること、博物館付近の駒寄川は、前回の調査以降、多自然型護岸が整備されたことで、流路に瀬と淵が形成され、河岸植生が豊かになったことが、それぞれ水生生物の生息環境の確保に寄与している可能性があります。なお、淡水性の指標種のうち、アブラハヤとヌカエビ※の2種類は、今回の調査では生息が確認されず、今後の動向を注視する必要があります。

通し回遊性の指標種は、河口からの距離が短い中下流域に位置する調査地点で確認種類数が多い傾向が認められました。通し回遊性の種類は、すべての調査地点で確認され、その生活様式から市内の水系環境の連続性が河口から上流まで比較的良好に保たれていると考えられます。ただし、ヌマチチブやモクスガニのように広範囲に確認された種類がいる一方で、アユやウキゴリのように確認地点が少ない種類もあり、すべての水生生物が容易に水系内での移動ができるよう改善していく必要があります。

※前回調査でヌカエビとして報告された種類は、ヌマエビ科の他種を誤同定した可能性があります。

調査地点			小出川水系											確認地点数					
			（下流） ←		小出川					（上流） →	松尾川		千ノ川		駒寄川		相模川		
			① 宮ノ下橋	② 下町屋親水護岸	③ 萩園橋	④ 鷹匠橋	⑤ 追出橋	⑥ 大黒橋	⑦ 松尾川河口	⑧ 梅田橋	⑨ 北茅ヶ崎橋	⑩ 新駒寄橋	⑪ 博物館裏		⑫ 平太夫新田 (相模川中洲)	⑬ 平太夫新田			
分類群	種名	生活型																	
魚類 ※1	アブラハヤ	淡																0	
	アユ	回		○							○	○		★			★	2	
	ウキゴリ	回				★					○	★						2	
	ウグイ	淡									●		★	★			●	4	
	クロダハゼ※2	淡						★										1	
	シマヨシノボリ	回	○		★	★				○			★	★				4	
	ドジョウ※3	淡						○	○		○		○	●				1	
	ナマズ	淡						★			○	★	★					3	
	ニゴイ	淡	★		●	★		●			●		★	★				7	
	ニホンウナギ	回	★	○	○					★	●	★			★		●	6	
ヌマチチブ	回	●	●	★	★	★		●	★	★		★	★	●	★		11		
甲殻類	テナガエビ	回	★	●	★	★	★	●	●	★	★	★	★	●	★		13		
	ヌカエビ	淡			○	○	○		○	○	○						0		
	ヒラテナガエビ	回			★					★	★		★				4		
	ミゾレヌマエビ	回	★	●	●		○		★	●	●			★	★		8		
	モクスガニ	回	●	●	●	●	●	●	○	●	●	★	★	●	●		12		
淡水性の確認種類(種)			1		1	1	3			2	1	2	3	1	1				
通し回遊性の確認種類(種)			5	4	6	5	3	2	4	6	7	3	6	5	6				
第4回調査の確認種数(種)			6	4	7	6	6	2	4	8	8	5	9	6	7				
第3回調査の確認種数(種)			3	6	5	2	5	2	5	11	4	1	1	3	3				

備考 ※1: 第3回調査で主要河川指標種とされていたタモロコ、トウヨシノボリは、第4回調査で指標種外とした。

※2: 第4回調査で、主要河川指標種にクロダハゼを追加した。

※3: 第3回調査で確認されているドジョウは、在来のドジョウ(在来系統)と外来のドジョウ(大陸系統)が区別されていない。第4回調査で、ドジョウ(大陸系統)は外来種として除外した。

淡: 一生を淡水域で生活する種類(淡水性)

●: 第3回調査と第4回調査で確認された種

回: 生活史の中で、川と海とを行き来する種類(通し回遊性) ★: 第3回調査では確認されていないが、第4回調査で確認された種

○: 第3回調査で確認されたが、第4回調査では確認されなかった種

2 第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査の内容と結果

(6) 細流指標種の確認状況

細流の調査地点は、地形的特徴から河川源流域と水田地帯の用水路等に分けられます。源流域に生息するホトケドジョウとサワガニは、赤羽根十三図で確認されました。清水谷では、サワガニが確認されましたが、ホトケドジョウは第3回調査以降、確認されていないため、絶滅した可能性を考慮し、留意する必要があります。

水田地帯の用水路は、河川本流に生息する水生生物の繁殖や稚仔の生息場所として機能しています。行谷水路では、前回調査では5種、今回調査では1種が発見されました。同地点では、小出川の遊水地造成工事に伴い、前回調査で主たる調査水域であった小出川沿いの氾濫原内の水路への立入が制限されたため、調査水域を上流側の水田地帯の水路に設定しました。確認された指標種が減った要因として、調査地点が異なったこと、氾濫原側の水路と水田地帯側の水路との間には落差工が施され、これにより魚類等の遡上が阻害されている可能性があることが考えられます。また、同地点は調査対象地内で唯一のマルタニシの生息水域ですが、今回調査では発見されませんでした。

分類群 種名		調査地点								確認地点数
		1 中央公園北水路	2 小系川源流付近 (赤羽根十三図)	3 清水谷	4 芹沢水田用水路	5 里山公園・調節池 (芹沢池)	6 行谷水路	7 西久保水田用水路	8 左岸用水(行谷)	
魚類	アブラハヤ									0
	ドジョウ	○					○	○	○	0
	ナマズ						○	★		1
	ホトケドジョウ		●							1
甲殻類	サワガニ		★	●						2
	ヒラテナガエビ	●								1
	モクスガニ	●			★		○	★		3
貝類 ※1	カワニナ	●		●	●	★	●		○	5
	マルタニシ						○			0
第4回調査の確認種数(種)		3	2	2	2	1	1	2	0	
第3回調査の確認種数(種)		4	1	2	1	0	5	1	2	

備考 ※1:第3回調査で細流指標種となっていたヒメタニシは、第4回調査で指標種とした。

●:第3回調査と第4回調査で確認された種

★:第3回調査では確認されていないが、第4回調査で確認された種

○:第3回調査で確認されたが、第4回調査では確認されなかった種

地域の生態系を脅かすおそれの高い外来生物

第4回調査では、地域の生態系を脅かすおそれの高い外来生物（外来生物法に基づき指定されている特定外来生物等）のうち、近年水域で生育域を拡げつつある植物ナガエツルノゲイトウについて、主要河川における侵入状況の確認を行いました。

その結果、千ノ川を除く相模川水系と、その下流域である相模川に侵入している状況が記録されました。外来生物の影響やその防除は大きな課題であり、特に水域における対策については、河川管理者や市民等、多様な主体の連携が必要です。

調査地点 種名	小出川水系												
	調査地点 (下流)		小出川		調査地点 (上流)		松尾川	千ノ川	駒寄川		相模川		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
ナガエツルノゲイトウ	○	○	○	○			○				○	○	○

3 調査地区の変化と評価の概要

3.1 指標種の確認状況の変化

(1) 陸域の指標種

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を比較すると、指標種の確認種数が増えた調査地区がある一方で、造成や土地利用の変化により特徴的な草地環境が失われたために草地指標種が大きく減少する等、環境変化の影響が表れている調査地区もあります。また、管理方法の変化が影響を及ぼしていると考えられる調査地区も見られました。なお、市民による保全活動が行われている調査地区の中には、指標種の確認種数が増えているケースもあり、保全管理作業の成果が現れているものと思われます。

第3回調査の指標種確認種数

エリア 環境区分	柳谷	行谷	清水谷	長谷	赤羽根 十三図	平太夫 新田	柳島	城之腰	汐見台
樹林	34	23	29	17	16	8	5	18	3
草地	21	22	16	19	14	9	6	15	2
水辺	19	27	18	1	11	10	4	6	1
海岸							11		14
計	74	72	63	37	41	27	26	39	20

備考) 第4回調査における指標種リストに基づき集計した。

第4回調査の指標種確認種数

エリア 環境区分	柳谷	行谷	清水谷	長谷	赤羽根 十三図	平太夫 新田	柳島	城之腰	汐見台
樹林	34	22	28	14	19	7	4	19	4
草地	16	24	13	10	16	11	11	14	4
水辺	17	24	13	3	12	8	6	5	3
海岸							9		13
計	67	70	54	27	47	26	30	38	24



マルバスマイレ

3 調査地区の変化と評価の概要

(2) 水域の指標種

指標種の確認状況を前回調査と比較すると、河川の調査地点では、全体として確認種数が増加しました。これは主に通し回遊性の種類の確認数が増えたことによるものです。通し回遊性の水生生物の出現は、河川のみならず、海域の環境にも影響を受けるため、引き続きモニタリングが必要です。

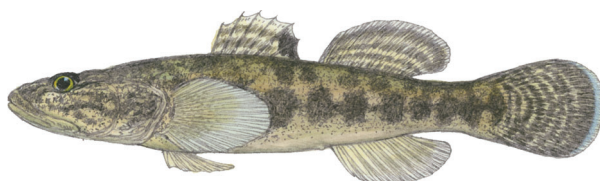
細流の調査地点では、前回調査との変化は概ね認められませんでした。行谷水路については、確認種数が大きく減少しました。これは、調査箇所が異なること、水辺環境が改変されたことが原因である可能性があります。

主要河川指標種の確認種数

調査地点	小出川水系											相模川	
	← 小出川 → (上流)											相模川	相模川
	(下流)												
	① 宮ノ下橋	② 下町屋親水護岸	③ 萩園橋	④ 鷹匠橋	⑤ 追出橋	⑥ 大黒橋	⑦ 松尾川河口	⑧ 梅田橋	⑨ 北茅ヶ崎橋	⑩ 新駒寄橋	⑪ 博物館裏	⑫ 平太夫新田 (相模川中洲)	⑬ 平太夫新田
第4回調査の確認種数(種)	6	4	7	6	6	2	4	8	8	5	9	6	7
第3回調査の確認種数(種)	3	6	5	2	5	2	5	11	4	1	1	3	3

細流指標種の確認種数

調査地点	① 中央公園北水路	② 小系川源流付近 (赤羽根十三区)	③ 清水谷	④ 芹沢水田用水路	⑤ 里山公園・調節池 (芹沢池)	⑥ 行谷水路	⑦ 西久保水田用水路	⑧ 左岸用水(行谷)
第4回調査の確認種数(種)	3	2	2	2	1	1	2	0
第3回調査の確認種数(種)	4	1	2	1	0	5	1	2



ウキゴリ

3 調査地区の変化と評価の概要

3.2 特に重要度の高い自然環境を有する地域の変化

<評価マップの作成方法>

モニタリングエリア内の特に重要な地域が分かるように評価マップを作成しました。

調査結果や土地利用状況を参考に、各エリアに特徴的な環境の指標種を評価対象として、それらの指標種が密に分布している場所の評価が高くなるように、次に示す手順で評価マップの作成を行いました。

<作成手順>

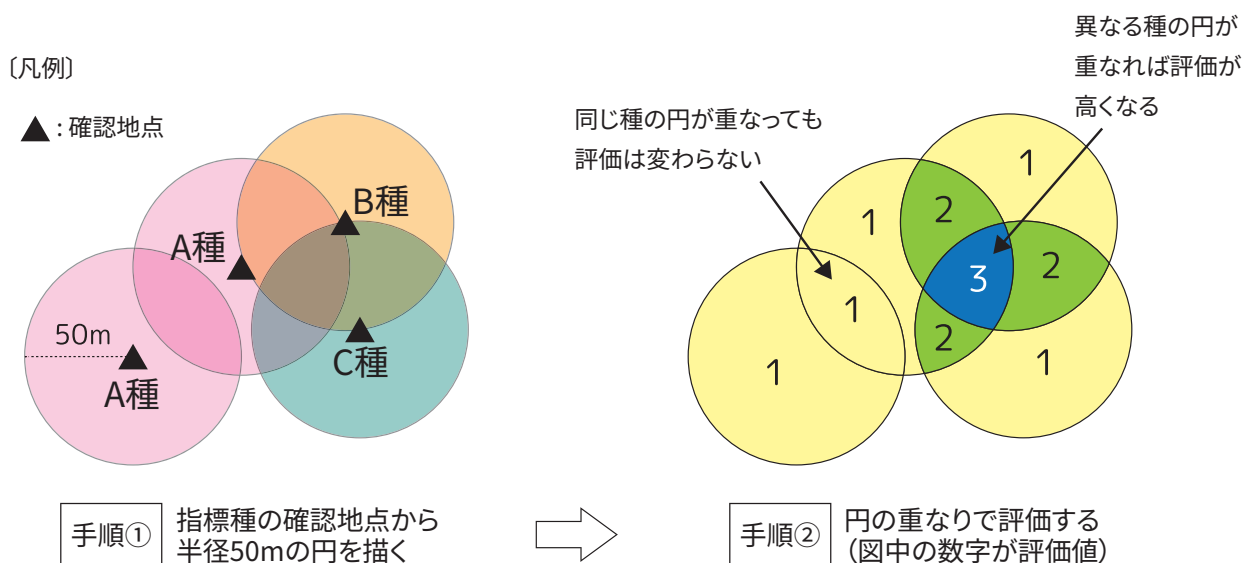
①評価対象の指標種の確認地点を中心に半径 50m の円を描く。

②描いた円の重なりが多い場所ほど高い評価とする。

その際には以下のルールを適用する。

- ・同種の円が重なった場合、評価は変わらない。
- ・異なる環境の指標種の円が重なった場合は、より高く評価する。
- ・モニタリングエリアごとに、そのエリアが重要とされる理由が異なるため、評価マップの対象環境区分は、下表に示すとおりとする。

③10m サイズのメッシュで区切り図示する。



<モニタリングエリアごとの評価対象環境区分>

調査結果や土地利用状況を参考に、各エリアに特徴的な環境の指標種を評価対象としました。

エリア	評価対象の指標種
柳谷	樹林、草地、水辺
行谷	樹林、草地、水辺
清水谷	樹林、草地、水辺
長谷	樹林、草地
赤羽根十三区	樹林、草地、水辺
平太夫新田	樹林、草地
柳島	海岸
城之腰	樹林、草地、水辺
汐見台	海岸



やなぎやと
柳谷

● 柳谷ってどういうところ？

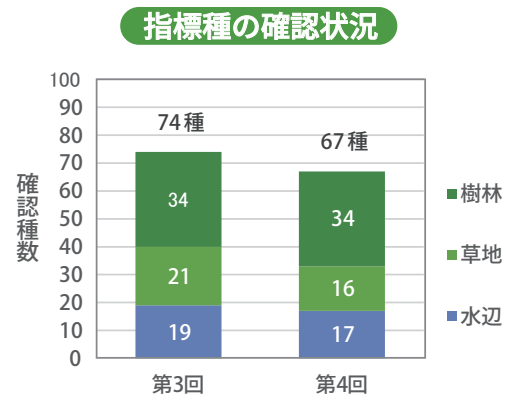
市の北部、市内最大規模の谷戸を有する地域で、大部分が神奈川県立茅ヶ崎里山公園に含まれます。茅ヶ崎里山公園の一部では、市民団体の手によって、農薬を使用しない昔ながらの米づくり、畑づくり、竹林管理等、生物多様性に配慮した管理が行われています。

第3回調査に引き続き、第4回調査でも調査地区のほぼ中央の芹沢池を中心とした谷戸底とその周りの樹林において多くの指標種が確認されました。谷戸底には水田、湿地、草地等さまざまな環境があり、コウヤワラビ、カヤネズミ、キンヒバリ等、16種の草地指標種の生息・生育が確認されました。また、谷戸底を囲む樹林では、アカガシ、ヤマガラ、アズマヒキガエル、ヤマトタマムシ等、今回調査を実施した調査地区で最も多い34種の樹林指標種の生息・生育が確認されました。

柳谷は、市内有数の良好な谷戸環境を有する場所として、特に重要度の高い自然環境を有する地域の一つとなっています。

● 8年間でどんな変化があったの？

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、樹林指標種、水辺指標種の確認種数はほぼ横ばいですが、草地指標種の確認種数が減少しています。



3 調査地区の変化と評価の概要

● 評価

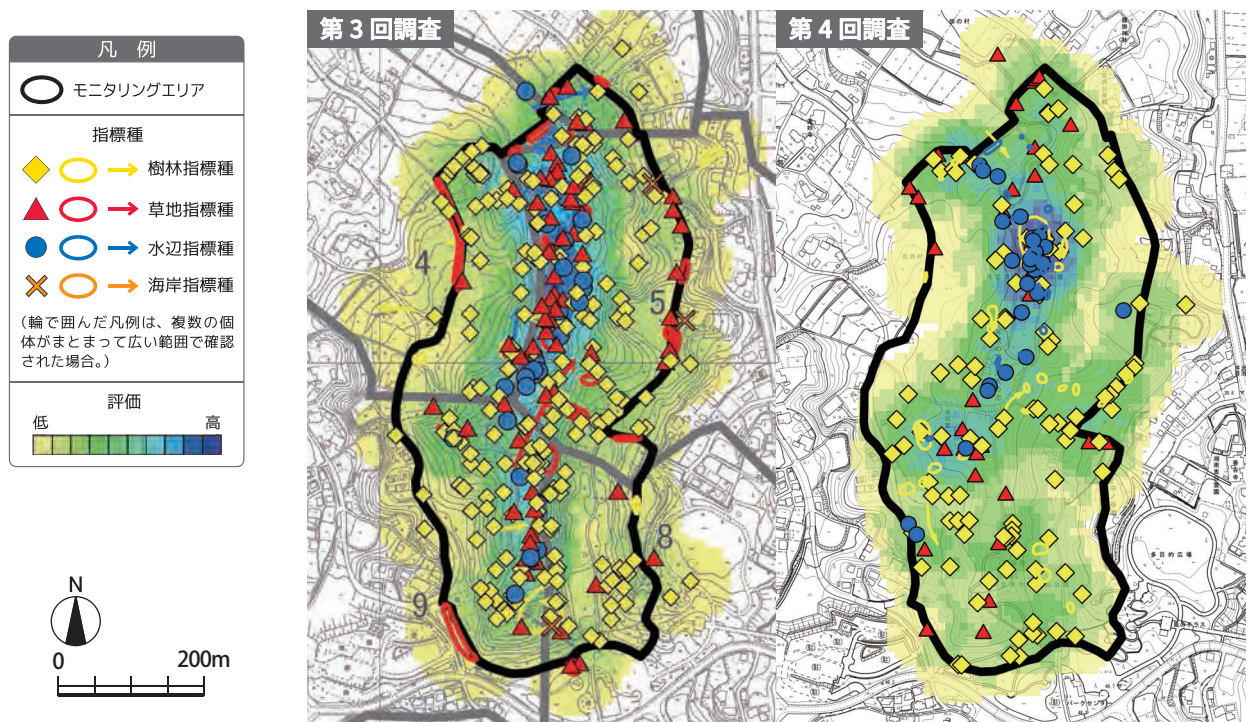
谷戸底の水田周辺に草地、水辺指標種が集中して確認されており、この傾向は第3回調査から大きな変化はありません。一方で、谷戸開口部の休耕田では、草地指標種の確認地点数がやや減少傾向となっています。

また、第3回調査では調査範囲の縁辺部でホタルブクロ等の草地指標種が多く確認されていましたが、第4回調査ではやや減少しており、管理状況の変化で一部の種が減少した可能性があります。

樹林については、第3回調査に引き続き、マルバスマレ等多数の指標種が確認されており、良好な環境が維持されていると言えます。また、全調査地区の中で唯一、樹林指標種であるウスタビガが継続して確認されています。

一方で、第3回調査でもサシバは確認されませんでした。県内全域でサシバの繁殖地は激減しており、第4回調査でも未確認となっています。

草地指標種の確認種数が減少していますが、現時点においても市内の自然環境のコアエリアとして機能していると評価できます。柳谷の大部分は茅ヶ崎里山公園の公園区域として管理されており、良好な自然環境に配慮した管理を継続することが望まれます。



指標種確認位置 & 評価マップ

第4回調査で確認された指標種

樹林：アカガシ、ウラシマソウ、エビネ、オオハナワラビ、カマツカ、コ克蘭、セントウソウ、ツクバトリカブト、ヒトリシズカ、マルバスマレ、ヤマコウバシ、ヤマユリ、アオゲラ、ウグイス、エナガ、シロハラ、フクロウ、ヤマガラ、アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンマムシ、ニホンヤモリ、ウスタビガ、エゾカタビロオサムシ、クツワムシ、クロカナブン、ゴマダラチョウ、センノキカミキリ、トゲナナフシ、ニホントビナナフシ、ヒオドシチョウ、ヒメマイマイカブリ、ヤマトタムシ、ヨツスジハナカミキリ

草地：クサボケ、コウヤワラビ、ツリガネニンジン、ナンバンギセル、フユノハナワラビ、ホタルブクロ、ワレモコウ、カヤネズミ、モズ、アオダイショウ、ヒガシニホントカゲ、ヤマカガシ、オナガササキリ、キンヒバリ、シブイロカヤキリ、ショウリョウバッタモドキ

水辺：イノモトソウ、オモダカ、カワテシヤ、チゴザサ、ニョイスミレ、ヤナギタデ、アオサギ、カイツブリ、カシラダカ、ニホンアカガエル、ヒバカリ、オニヤンマ(幼虫)、カトリヤンマ、ケラ、シオヤトンボ、シマアメンボ、ハイケボタル



● 行谷ってどういうところ？

市の北部、素掘りの細流や耕地整理されていない水田・畑地等、昔ながらの里山景観が残る地域で、左岸用水の東側は谷戸地形、西側は小出川の氾濫原となっています。

第3回調査に引き続き、第4回調査でも谷戸底から小出川沿いにかけて多くの指標種が確認されました。この範囲には、水田、あぜ道、湿った草地、細流等、さまざまな湿地環境があり、オモダカ、カシラダカ、ヒバカリ、カトリヤンマ等、今回調査を実施した調査地区で最も多い24種の水辺指標種の生息・生育が確認されました。また、草地指標種も24種と最も多く、クサボケ、カヤネズミ、ホオジロ、アオダイショウ、マメハンミョウ等が生息・生育している他、樹林指標種も比較的多く生息・生育しています。

行谷は、多様な生物の生息・生育環境となるさまざまなタイプの湿地環境を有する場所として、また、湿地環境周辺の樹林と一体となって市内有数の良好な谷戸環境を有する場所として、特に重要度の高い自然環境を有する地域の一つとなっています。

● 8年間でどんな変化があったの？

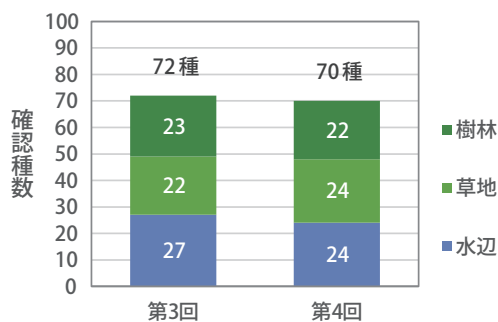
第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、確認種数はほぼ横ばいでしたが、第3回調査でも確認されなかったタイコウチは今回の調査でも確認されなかったため、市内では絶滅した可能性があります。反面、樹林指標種であるニホンマムシ等は虫類や、トゲナナフシ等の昆虫類、草地指標種であるハヤブサ等の鳥類や、ショウリョウバッタモドキ等の昆虫が新たに発見されており、全体的な環境は良い状態で保たれていると判断されます。

谷戸底の一部では市民団体が湿地の保全活動を継続して行っています。

一方で、休耕田や水田耕作が行われていた小出川沿いの氾濫原では、令和4年度から段階的に、神奈川県による遊水地造成計画が進められており、耕作が行われなくなりました。所有者が管理している場所については、草刈り等の手入れが続けられていますが、遊水地建設予定地の多くがオギやヨシ等の高茎草本群落に遷移しつつあり、徐々に変化を遂げています。

今後、遊水地の造成により、氾濫原の環境は大きく変化する見込みです。市では自然環境の保全・再生のため、引き続き県と協議を続けていきます。

指標種の確認状況



3 調査地区の変化と評価の概要

● 評価

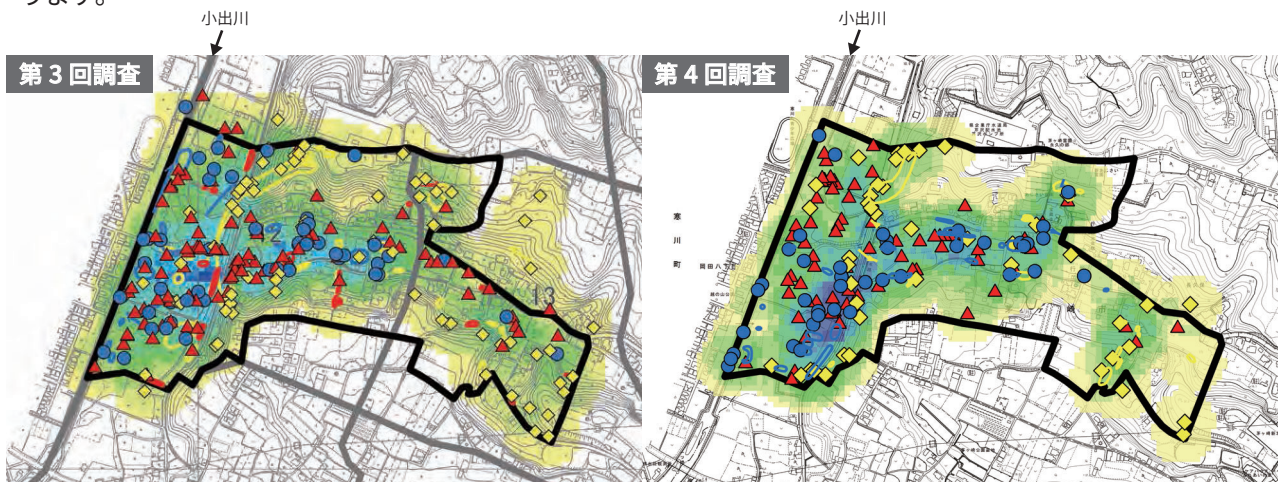
行谷は東側に谷戸、西側に氾濫原の見られる環境ですが、谷戸開口部から小出川沿いにかけての草地や水辺が特徴的で、柳谷、清水谷と異なり、樹林指標種よりも草地、水辺指標種が多く確認されています。

樹林地ではウラシマソウの群落が各所で見られた他、ゴマダラチョウ、ヤマトタマムシが第3回調査から引き続き確認されていることから、比較的良好な状態で維持されていると考えられます。

また、小出川の氾濫原では、第3回調査から引き続きツリフネソウや、カヤネズミの球巣が多数確認されています。特に、調査地区の西側で集中して確認されているエリアがあり、これは第3回調査と同様であることから、重要なエリアであると評価できます。

第4回調査では、第3回調査と同様、谷戸底水田周辺から小出川沿いの草地で水辺、草地指標種が多数確認されており、こうした指標種にとって重要な環境になっていると評価できます。

調査範囲の西端に位置する小出川の氾濫原は現在遊水地として整備されつつあり、指標種等の移植・移動（ミティゲーション）が市民・行政によって行われています。今後の整備によって、これらの種が影響を受けるのは避けられないため、整備前までに草地・水辺の指標種等を対象とした計画的な保全対策を行う必要があります。



指標種確認位置 & 評価マップ



第4回調査で確認された指標種

樹林：アカガシ、ウラシマソウ、エビネ、オオハナワラビ、カマツカ、ツクバトリカブト、ヒトリシズカ、マルバスマレ、ヤマユリ、アオゲラ、ウグイス、エナガ、オオタカ、シロハラ、ヤマガラ、シュレーゲルアオガエル、ニホンタマムシ、ゴマダラチョウ、トゲナナフシ、ニホントビナナフシ、ヒオドシチョウ、ヤマトタマムシ

草地：クサボケ、コウヤワラビ、ツリガネニンジン、ナンバンギセル、ノアザミ、フユノハナワラビ、ホタルブクロ、ワレモコウ、カヤネズミ、セッカ、ハヤブサ、ホオジロ、モズ、アオダイショウ、ヤマカガシ、オナガササキリ、ギンイチモンジセセリ、キンヒバリ、コバナササキリ、シブイロカヤキリ、ショウリョウバッタモドキ、スズムシ、マツムシ、マメハンミョウ

水辺：イノモトソウ、オモダカ、カワチシャ、チゴササ、ツリフネソウ、ボントクタデ、マコモ、ヤナギタデ、ヤノネグサ、アオサギ、イカルチドリ、オオジュリン、オオヨシキリ、カシラダカ、コサギ、コチドリ、ダイサギ、タシギ、ヒバカリ、オニヤンマ（幼虫）、カトリヤンマ、ケラ、シオヤトンボ、シマアメンボ

凡例

○ モニタリングエリア

指標種

◆ ○ → 樹林指標種

▲ ○ → 草地指標種

● ○ → 水辺指標種

× ○ → 海岸指標種

(輪で囲んだ凡例は、複数の個体がまとめて広い範囲で確認された場合。)

評価

低 高



● 清水谷ってどういうところ？

市の北東部、駒寄川の源流の1つの地域で、平成24年に一部が市内初の特別緑地保全地区に指定され、保全管理計画に基づく維持管理が行われています。

第3回調査に引き続き、第4回調査でも谷戸底に沿って多くの指標種が確認されました。谷戸の源頭部には駒寄川の水源の一つとなる湧水が存在し、谷戸底の止水や湿地には、チダケサシ、ニホンアカガエル、ヒバカリ、シマアメンボ等、多くの水辺指標種が生息・生育している他、両生・は虫類は草地指標種のアオダイショウ、ヒガシニホントカゲ、ヤマカガシの生息が確認されました。また、谷戸底を囲む樹林では、オオハナワラビ、ヤマガラ、ゴマダラチョウ等、多くの樹林指標種が生息・生育しています。

清水谷は、多様な生物の生息・生育環境となる谷戸底の止水や湿地、それらを囲む樹林等が一体となっている市内有数の良好な谷戸環境を有する場所として、特に重要度の高い自然環境を有する地域の一つとなっています。

● 8年間でどんな変化があったの？

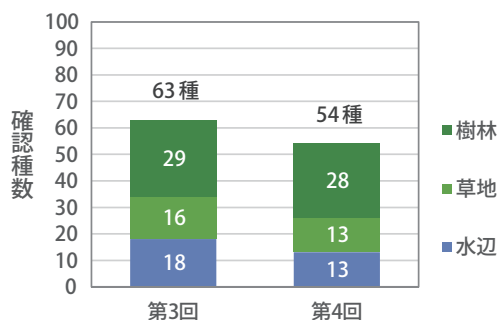
第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、樹林指標種はほぼ横ばい、草地指標種・水辺指標種の確認種数はやや減少しています。

清水谷では長年、市民団体によって、外来種の除去、湿地環境の維持管理、落ち葉掻きや除草といった林床植生の保護活動が行われており、そうした取り組みの継続によって現在の環境が維持されています。また、平成26年に策定された保全管理計画を令和6年に改定し、現在の状況に応じた保全管理が進められています。令和5年からは、樹林の環境改善のため、市が継続的に枯死木等の伐採を行っています。

草地指標種の減少の内容を見ると、ホタルブクロ等、4種が確認されませんでした。原因としては、生育地の日照不足等が考えられます。また、第3回調査で確認された水辺指標種の鳥類3種が確認されませんでした。3種のうち、コサギは個体数の減少が要因となっている可能性が考えられますが、アオサギは、5回実施した鳥類調査のタイミングで遭遇しなかったことが原因と考えられます。

なお、水辺指標種では、ホトケドジョウが確認されませんでした。第3回調査から引き続き確認されなかったため、絶滅の可能性を考慮し、留意する必要があります。

指標種の確認状況



3 調査地区の変化と評価の概要

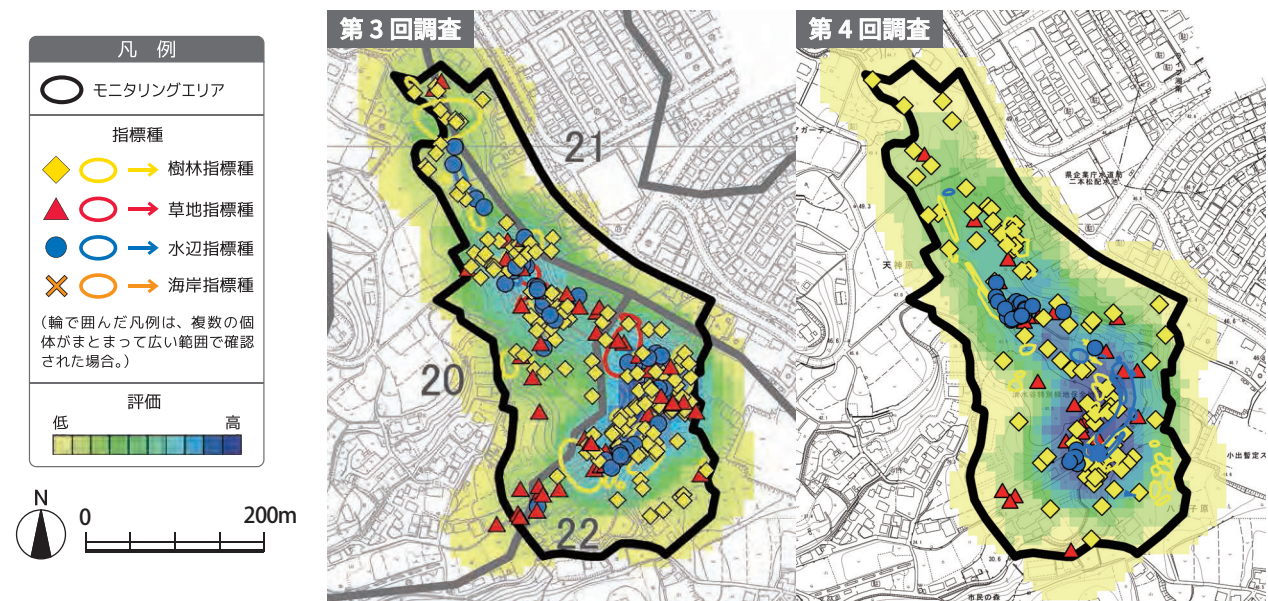
● 評価

樹林指標種は第3回調査とほぼ同様の種が確認されており、良好な樹林環境が維持されていると言えます。調査範囲の南側の樹林には、第3回調査と同様、樹林指標種がまとまって確認されているエリアが見られ、植物のカマツカ、鳥類のオオタカ等が確認されています。

一方、谷戸底では、草地、水辺の指標種の確認地点数がやや減少しました。第3回調査では北側のエリアでオニヤンマ、ヒバカリ等水辺指標種の確認が多かったのですが、第4回調査では減少しています。また、第3回調査では草地指標種のホタルブクロが確認されましたが、第4回調査では未確認でした。隣接する樹木の生長により日照条件が変化したことが原因となった可能性があります。加えて、法面に外来種のベニカタバミが繁茂しており、指標種と競合した可能性もあります。

水辺指標種では植物のツリフネソウの群落や両生類のニホンアカガエルの繁殖が確認されているほか、樹林指標種であるシュレーゲルアオガエル等の繁殖も確認されています。昆虫類でも、ケラ、キンヒバリ等の指標種が確認されており、湿地環境を好む生きものが継続して生育・生息しています。

全体的には指標種の種数、確認地点数が減少しましたが、第3回調査に引き続き良好な環境が維持されていると評価できます。樹林指標種に大きな変化はないことから、今後は草地・水辺指標種への配慮が課題です。



指標種確認位置&評価マップ

第4回調査で確認された指標種

樹林：アカガシ、ウラシマソウ、エビネ、オオハナワラビ、カマツカ、コ克蘭、ダイコンソウ、ツクバトリカブト、ヒトリシズカ、マルバスマレ、ヤマコウバシ、ヤマユリ、アオゲラ、ウグイス、エナガ、オオタカ、シロハラ、ノスリ、ヤマガラ、ルリビタキ、アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、クロカナブン、ゴマダラチョウ、ニホントビナナフシ、ヒオドシチョウ、ヤマトタムシ、ヨツスジハナカミキリ

草地：コウヤワラビ、ナンバンギセル、ヒトツバハギ、ワレモコウ、チョウゲンボウ、ホオジロ、モズ、アオダイショウ、ヒガシニホントカゲ、ヤマカガシ、キンヒバリ、ショウリョウバッタモドキ、マメハンミョウ

水辺：イノモトソウ、チダケサシ、ニョイスミレ、ツリフネソウ、ボントクタデ、ミゾコウジュ、ヤナギタデ、ニホンアカガエル、ヒバカリ、オニヤンマ(幼虫)、カトリヤンマ、ケラ、シマアメンボ



ながやと
長谷

● 長谷ってどういうところ？

市の中北部、2つのゴルフ場（スリーハンドレッドクラブと湘南カントリークラブ）に挟まれた地域です。第3回調査では調査地区のほぼ中央で多くの指標種が確認されました。ここはエノキやコナラを主体とした広葉樹林に囲まれた貧栄養で乾燥した草地があり、アリノトウグサ、ヒキヨモギ、カナビキソウ等、市内ではほぼ本調査地区のみで確認されている種を含む多くの草地指標種が生息・生育していました。また、周囲の広葉樹林では、まとまった樹林を必要とするヤマガラ等の鳥類、ヤマユリ等の植物に代表される樹林指標種が生息・生育しています。

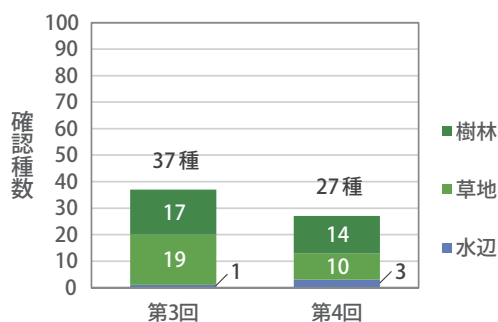
長谷は、広い樹林に囲まれた市内では珍しい貧栄養で乾燥した草地環境を有する地域として、特に重要度の高い自然環境を有する地域の一つとされています。

● 8年間でどんな変化があったの？

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、9地区の中で最も確認種数が減少している結果となりました。

原因としては、調査地区のほぼ中央にあった貧栄養で乾燥した草地が平成30年に行われた造成工事によって盛り土され、特徴的な環境が失われたことが挙げられます。盛り土された場所には、オギやチガヤが繁茂し、その上をクズが覆う草地となりました。そのため、長谷の特徴であった、ヒキヨモギやアリノトウグサ等貧栄養で乾燥した草地を好む植物の多くが確認できない状況となりました。また、樹林指標種についても、第3回調査では確認されていたヒトリシズカ（植物）、ヒオドシチョウ（昆虫類）が、第4回調査では確認されませんでした。

指標種の確認状況



3 調査地区の変化と評価の概要

● 評価

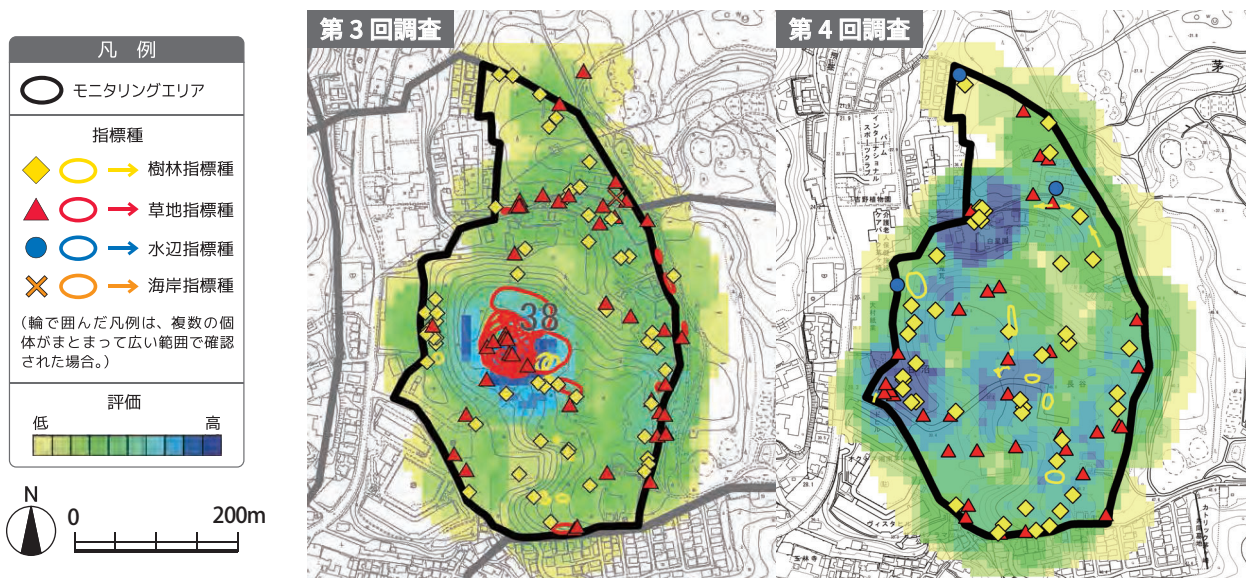
調査範囲の中央部に、周囲を樹林に囲まれるような形で約0.5haの日当たりの良い貧栄養の草地が分布していました。しかし、平成30年度の造成工事により、この草地は完全に消失しました。

急激な環境の変化により、草地指標種の確認状況は大きく変化しました。第3回調査時には中央部の草地に植物の指標種が群落を形成していましたが、第4回調査では確認できませんでした。一方で、その周辺の樹林や草地の指標種に、大きな変化はありませんでした。

樹林ではカマツカ等の植物、ゴマダラチョウ、クツワムシ等の指標種が第3回調査から引き続き確認されています。また、オオタカも第3回調査に引き続き確認されていることから、樹林環境は維持されていると言えます。指標種の確認状況に変化はありませんが、樹林の管理頻度が低く、倒木の発生や藪化が進んでいます。

貧栄養の草地に生育していたアリノトウグサ、カナビキソウ、ヒキヨモギは、市内ではほぼ長谷にのみ生育が確認されていましたが、これらは消失した可能性が高いと言えます。また、昆虫類でも、貧栄養で乾燥した草地等に生息するナキイナゴ、クルマバツタが確認されず、長谷から絶滅したものと考えられます。

樹林指標種には継続して確認されている種類も多いことから、樹林環境の保全に努め、残された環境をできるだけ維持するのが望ましいと言えますが、このままの状態が続くのであれば、今後の調査における位置づけを見直す必要があります。



指標種確認位置&評価マップ

本エリアの評価対象外である水辺指標種の確認位置は参考として示している。

第4回調査で確認された指標種

樹林：ウラシマソウ、エビネ、カマツカ、ヤマユリ、アオゲラ、ウグイス、エナガ、オオタカ、シロハラ、ヤマガラ、クツワムシ、ゴマダラチョウ、トゲナナフシ、ヤマトタマムシ

草地：コウヤワラビ、ノアザミ、フユノハナワラビ、ホタルブクロ、ホオジロ、ヒガシニホントカゲ、シブイロカヤキリ、ジャコウアゲハ、ショウリョウバッタモドキ、スズムシ

水辺：カトリヤンマ、ケラ、シオヤトンボ

3 調査地区の変化と評価の概要

長谷の草地の変化状況

第3回調査実施時期と、第4回調査実施時期の長谷の様子を、航空写真で比較しました。

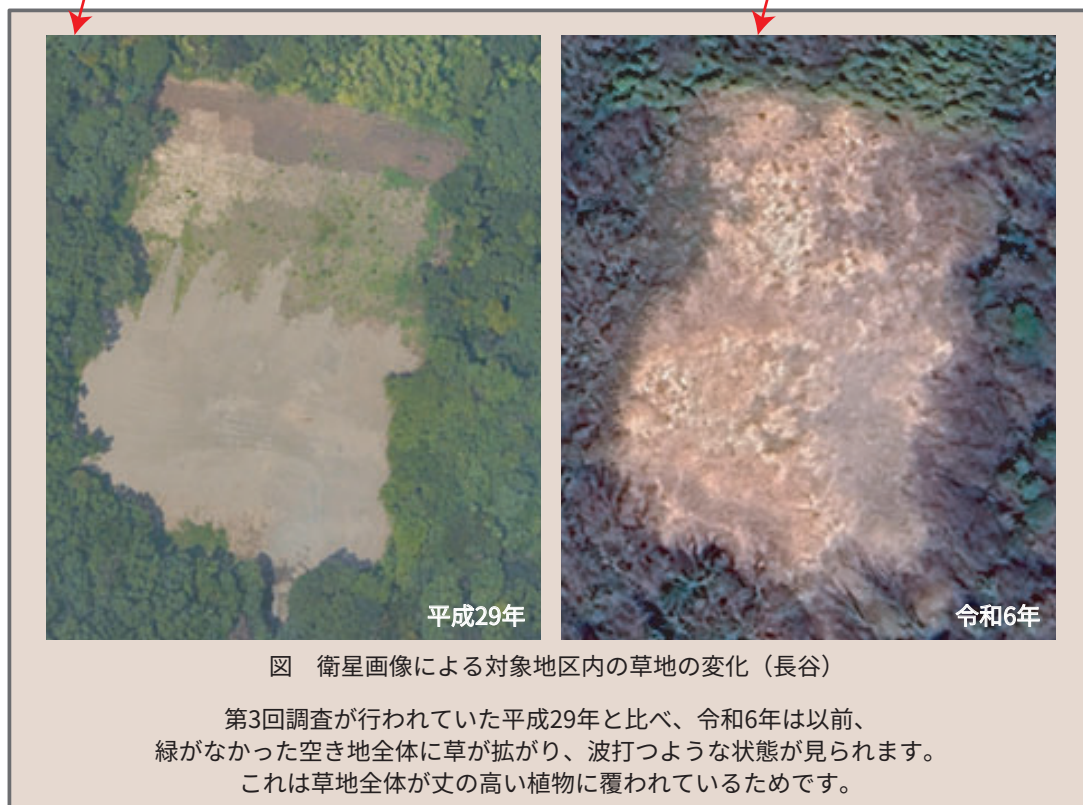


2017年4月（平成29年）



2024年3月（令和6年）

Google Earth より引用



3 調査地区の変化と評価の概要

コラム：地球温暖化の影響について

地球温暖化は、身近な自然にどのような影響を与えているのでしょうか。

世界気象機関（WMO）によると、既に温室効果ガスの排出をはじめとする人類の活動が、産業革命以前の1850～1900年の平均と比較して、2014～2023年に約1.20℃（±0.12）の地球温暖化を引き起こしていることが報告されています。特に2023年においては、世界の年平均気温が観測史上最も高く、産業革命以前より1.45℃（±0.12）高くなったと報告されました。（環境省「第6次環境基本計画（令和6年5月21日）」より）

神奈川県内の気象観測所（辻堂、小田原、横浜）における年平均気温の推移をしてみましょう（図1）。日本の気温上昇は世界平均よりも早く進行しており、神奈川県においても、世界の上昇幅より大きくなっています。例えば横浜の平均気温をみると、1980年代は概ね15度台でしたが、2023～2024年は18度となっており、3度上昇しています。

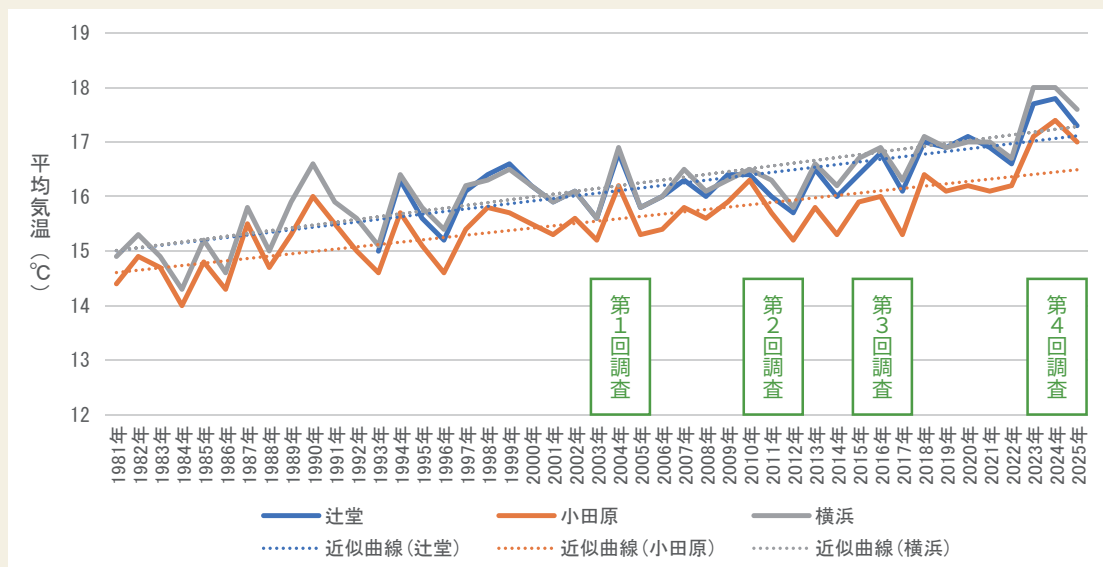


図1 神奈川県内における年平均気温の推移

地球温暖化は様々な生物に影響を及ぼしていることが知られていて、生物の分布状況にはっきりとその影響が現れることがあります。例えば、写真のタシロラン（菌従属栄養植物であり、栽培や増殖が極めて難しいため、人の手では分布拡大しません）は、1950年代までは南日本からの報告しかありませんでしたが、1960年代以降、関東地方でも見られるようになったとされています（東京大学総合研究博物館サイトより）。

この他、温暖化の影響として、市内でもクマゼミなどの一部の昆虫の増加や、植物の開花時期の変化などが起きています。大きな地球の変化が身近な自然の姿を変えつつある今、私たち一人ひとりにできることを考え、家庭での省エネや「3R（※）」の実践等、思いついたことから取り組んでみましょう。

※3Rとは、「リデュース・リユース・リサイクル」の略で、「ごみの発生抑制・使えるものの再使用・ごみの再生使用」を意味します。



写真：市内各所で見られるタシロラン



● 赤羽根十三図ってどういうところ？

市の中東部、藤沢市を流れる引地川水系の小糸川の源流にあたる地域で、湘南カントリークラブの一部敷地を含む南北方向に細長い谷戸と未舗装の市道沿いの草地環境からなります。平成28年に一部が特別緑地保全地区に指定されました。

第3回調査に引き続き、第4回調査でも調査地区の西部と東部で指標種が多く確認されました。本調査地区は限られた面積の中に細流、湿地、草地、樹林が隣接し合う複合的な環境が形成されており、調査地区西部の市道沿いはやや乾いた草地であり、ツリガネニンジンやヒトツバハギ等の植物、キンヒバリやスズムシを始めとする昆虫类等、多くの草地指標種が生息・生育しています。エリア東部には水量の安定した細流があり、その流れではオニヤンマの幼虫等が確認されている他、細流や湿地とそれに隣接する樹林では、ダイコンソウやセントウソウ等の植物、エナガやシロハラ等の鳥類、クツワムシ等の昆虫类等、多くの樹林指標種が生息・生育しています。

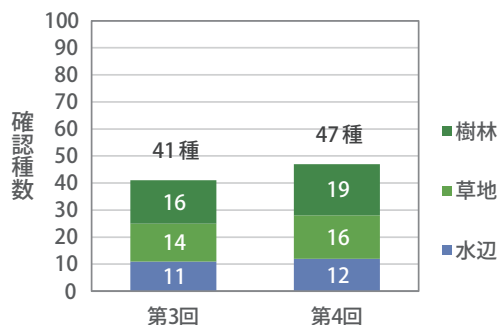
赤羽根十三図は、比較的狭い面積ながら多様な自然環境を有する場所として、また、市内で唯一相模川水系以外の谷戸環境を有する場所として、特に重要度の高い自然環境を有する地域の一つとなっています。

● 8年間でどんな変化があったの？

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、樹林指標種・草地指標種・水辺指標種のいずれも確認種数が増加しています。

本調査地区の東部は、市民と市職員によって、開放水面の確保や滞水域の創出、マダケ等の抑制管理、外来種のオランダガラシやツルニチニチソウの除去等が行われており、生物多様性の保全に配慮した保管理作業の効果が現れているものと思われます。また、他の調査地区と比較して、人の立入が少ない場所であることも、自然環境の保全に寄与していると考えられます。特別緑地保全地区への指定と同時に保管理計画が策定され、定期的な保管理が行われています。

指標種の確認状況



3 調査地区の変化と評価の概要

● 評価

調査地区の一部（約2.9ha）が特別緑地保全地区に指定されたことにより、保全管理計画に基づいて、生物多様性に配慮した保全管理が行われています。また、隣接するゴルフ場においても、コース間の樹林の林床や草地の管理が、生物多様性の保全に配慮して適切に行われています。こうしたゴルフ場の管理状況が、市民による特別緑地保全地区の管理と相乗効果を生み出し、指標種の増加に反映されていると言えます。

調査範囲の東側には南北方向の細い谷戸環境が見られ、第3回調査と同様、多くの指標種が集中して確認されています。西側の市道沿いにも樹林・草地指標種が帯状に確認されており、この傾向も第3回調査と同様でした。なお、第3回調査と比べて、すべての環境区分で指標種の確認種数が増加しています。

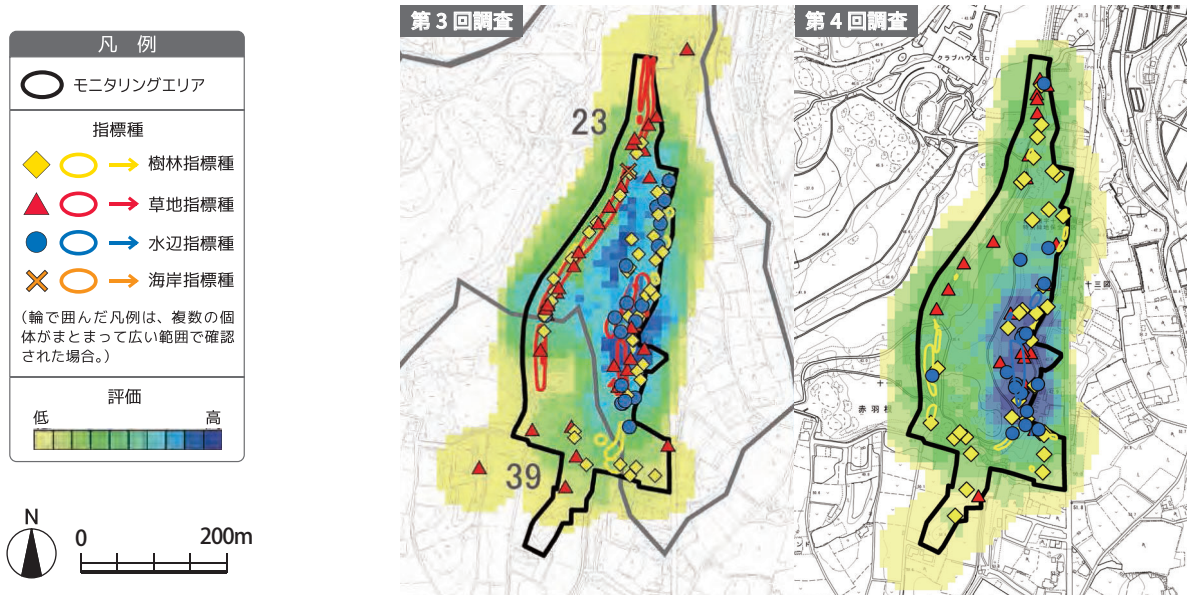
樹林指標種は、特に南部を中心に確認されています。ノスリ等の猛禽類が確認されており、それらの餌場として機能していることから、狭い範囲ではあるものの、生態的な重要性が高い場所であると推察されます。

草地指標種では、ホタルブクロ、ツリガネニンジン等が確認されており、良好な草地環境が維持されていることが窺えます。

水辺指標種としては、南東部の水辺でPontopeltisの生育が第3回調査に引き続き確認されています。また、昆虫類ではカトリヤンマ、ミヤマアカネ等のトンボ類が確認されていることから、良好な湿地環境が維持されていると言えます。なお、両生類ではニホンアカガエルの成体が確認されていますが、産卵は調査地区外のゴルフ場内で行われており、ゴルフ場や調査地区内の樹林と一体となって生息環境として機能しています。

全体として、明確なゾーニングによるメリハリのある管理が行われており、活動の効果が指標種の増加に反映されていると言えますが、南側の水源涵養林の維持管理等、課題も存在します。

規模は小さいものの、市内における自然環境のコアエリアとして機能していると評価できます。引き続き生物多様性に配慮した保全管理を行うことで、環境を維持することが重要です。



指標種確認位置&評価マップ

第4回調査で確認された指標種

樹林：アカガシ、ウラシマソウ、オオハナワラビ、カマツカ、セントウソウ、ダイコンソウ、アオゲラ、ウグイス、エナガ、シロハラ、ノスリ、フクロウ、ヤマガラ、ニホンヤモリ、クツムシ、クロカナブン、ゴマダラチョウ、トゲナナフシ、ヤマトタマムシ
 草地：コウヤワラビ、ツリガネニンジン、ノアザミ、ヒトツバハギ、フユノハナワラビ、ホタルブクロ、ワレモコウ、チョウゲンボウ、ホオジロ、モズ、ヒガシニホントカゲ、オナガササキリ、キンヒバリ、シブイロカヤキリ、ジャコウアゲハ、スズムシ
 水辺：イノモトソウ、チダケサシ、ニョイスミレ、Pontopeltis、ニホンアカガエル、ヒバカリ、オニヤンマ（幼虫）、カトリヤンマ、ケラ、シマアメンボ、ミヤマアカネ、ホトケドジョウ



● 平太夫新田ってどういうところ？

市の南西部、相模川に沿った地域で、すべてが相模川の河川区域に含まれ、畑として広く利用されています。また、造成された場所には平地林が、相模川の水際のごく一部には河畔林が見られます。

他の調査地区と比較すると確認された指標種の数はいくつか少ないですが、畑やその周辺の草地では、は虫類のシマヘビ、鳥類のホオジロ、モズ、昆虫類のマツムシやジャコウアゲハ等の草地指標種が生息・生育しています。また、平地林では、鳥類のウグイスやアオゲラ、昆虫類のゴマダラチョウやヤマトタマシ等の樹林指標種も生息・生育しています。相模川には、ダイサギやミサゴ等も生息しており、第4回調査ではオオヨシキリも確認されています。

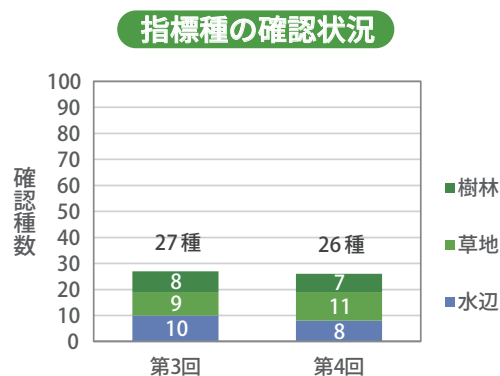
平成21年の築堤工事の際に樹木を移植した場所を市が占用し、その占用地を中心に市民団体・企業等のさまざまな主体による保全活動が行われています。平成30年2月には保全管理の考え方がとりまとめられ「生物多様性に配慮した管理を行い、希少性が高い動植物を保全すること」という目標のもとに、外来種の駆除や、環境に配慮した除草等の保全活動が進められています。

平太夫新田は、相模川を挟んで対岸の平塚市と連続する場所として、また、寒川町から海老名市へと相模川沿いに続く広域的な生物の移動経路（コリドー）として機能する場所として、特に重要度の高い自然環境を有する地域の一つとなっています。

● 8年間でどんな変化があったの？

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、全体としてはほぼ横ばいですが、樹林指標種と水辺指標種の確認種数が減り、草地指標種の確認種数が増加しています。

一方で、第3回調査では確認されていた草地指標種の哺乳類であるカヤネズミが、調査地区内では確認されませんでした。カヤネズミは、生息環境としてオギ等の巣材となる植物を中心とした連続的な草地を必要とします。調査地区に隣接する堤防土手の草地では営巣が確認されたため、これは調査地区内に営巣に適した草地環境がないことを示唆しています。



3 調査地区の変化と評価の概要

● 評価

平太夫新田は調査地区が河川区域であることから、自然的、あるいは人為的な要因が作用しながら維持されてきた環境です。

左岸の堤防沿いの樹林の林縁部にはマツムシ等、昆虫類の草地指標種が帯状に分布しています。

調査地区の北部、中部のややまとまった草地・樹林で、指標種が集中しているエリアがありますが、この傾向は第3回調査と同様でした。畑の周辺等に草地在りまわって残されており、こうした環境が草地を利用する指標種の生息・生育地となっていると考えられます。

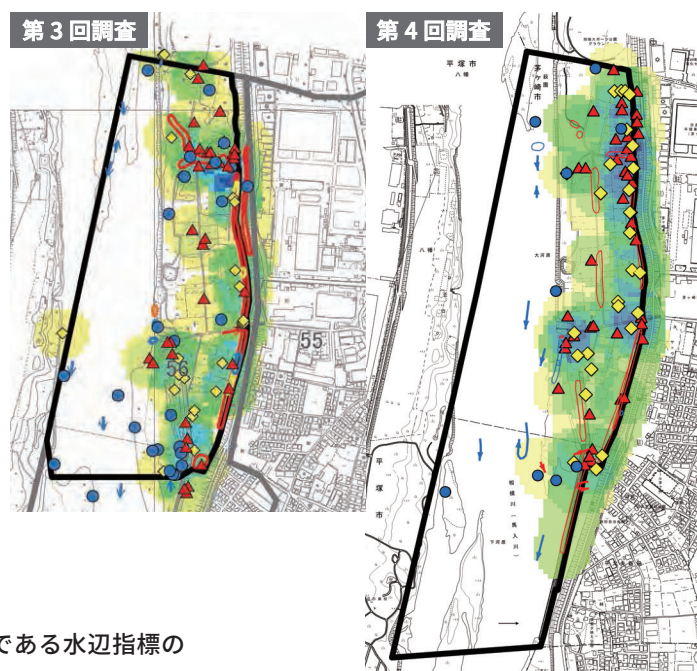
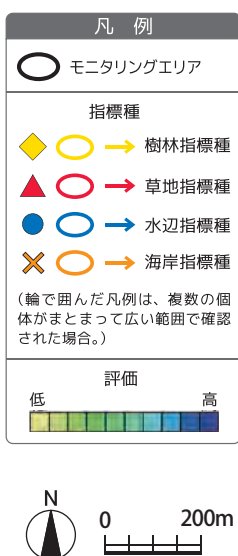
なお、北部のエリアでは第3回調査では草地指標種であるカヤネズミが確認されていましたが、第4回調査では確認されておらず、調査範囲外の堤防法面の草地在り確認されたのみとなっています。もともと堤外地の草地環境にカヤネズミが生息していたので、第4回調査では確認できませんでしたが、現在でも生息している可能性はあると思われます。

また、河川敷という環境を反映して、植物ではカワチシャ、鳥類ではオオヨシキリといった水辺指標種の確認地点が全体に点在しています。第3回調査と比較すると、水辺指標種の確認地点数が減少していますが、そのほとんどは鳥類の確認地点数が減少したことによります。しかし、調査頻度の違いによる可能性があるため、単純な比較はできない状況です。

河川敷の多くは耕作地で、盛り土等の人為的な改変が行われた環境であるため、本来の河川特有の生態系が維持されているのは、調査地区西側の川辺のごくわずかな部分です。また、出水時は水没するため、指標種はあまり確認されておらず、その分布パターンも変化しています。一方、市が占用して保全管理作業を行っているエリアの周辺では、第3回調査に引き続き指標種が集中的に確認されています。

相模川では令和元年、令和5年、令和6年に高水敷まで浸水する出水がありました。河川沿いという立地から、ある程度の環境の攪乱のうえに維持されており、両生類・は虫類の指標種が入れ替わったというのもこうした環境であることを反映している可能性があります。

そのような動的な要素を持ちつつ、バランスを保っている河川特有の環境が維持されているのが、この調査地区の特徴の一つです。今後は、外来種駆除の他、カヤネズミの生息に適した環境整備等が課題として挙げられます。



第4回調査で確認された指標種

樹林：オオハナワラビ、アオゲラ、ウグイス、アズマヒキガエル、ゴマダラチョウ、ヒメマイマイカブリ、ヤマトタマムシ

草地：ノアザミ、セッカ、ホオジロ、モズ、シマヘビ、キンヒバリ、シブイロカヤキリ、ジャコウアゲハ、スズムシ、ヒガシキリギリス、マツムシ

水辺：カワチシャ、ミゾコウジュ、ヤナギタデ、アオサギ、オオヨシキリ、コサギ、ダイサギ、ミサゴ

本エリアの評価対象外である水辺指標の確認位置は参考として示している。

指標種確認位置 & 評価マップ



やなぎしま
柳島

● 柳島ってどういうところ？

市の南西端、湘南海岸に沿った地域で、柳島キャンプ場やサイクリングロードがあり、柳島キャンプ場内には自然環境保全エリアが設定されています。

第3回調査に引き続き、第4回調査でも海岸に沿って指標種が多く確認されました。海岸沿いにはクロマツ林があり、その林内や周辺にはハマヒルガオ、コウボウシバ、ハマエンドウ等の砂浜特有の植物が生育しています。ハマエンドウに依存して生活するクロマメゾウムシや、漂着した生物の死骸等に集まるハマベエンマムシ類等も生息しています。

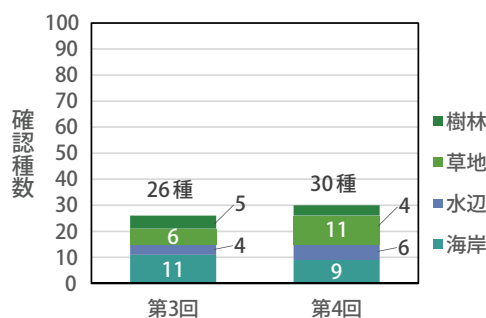
柳島は、サイクリングロード周辺に海岸指標種の生息・生育する砂地が帯状に見られる場所として、また、渡り鳥の重要な休息・給餌場として、特に重要度の高い自然環境を有する地域の一つとなっています。

● 8年間でどんな変化があったの？

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、海岸指標種の確認種数はやや減少しています。

8年前と現在で、クロマツ林の林内や周辺の状況に目立った変化はありませんでした。第3回調査では確認されなかった植物のオニシバやケカモノハシが第4回調査で確認されたことは、調査精度の向上等によるものと考えられます。

指標種の確認状況



コチドリ

3 調査地区の変化と評価の概要

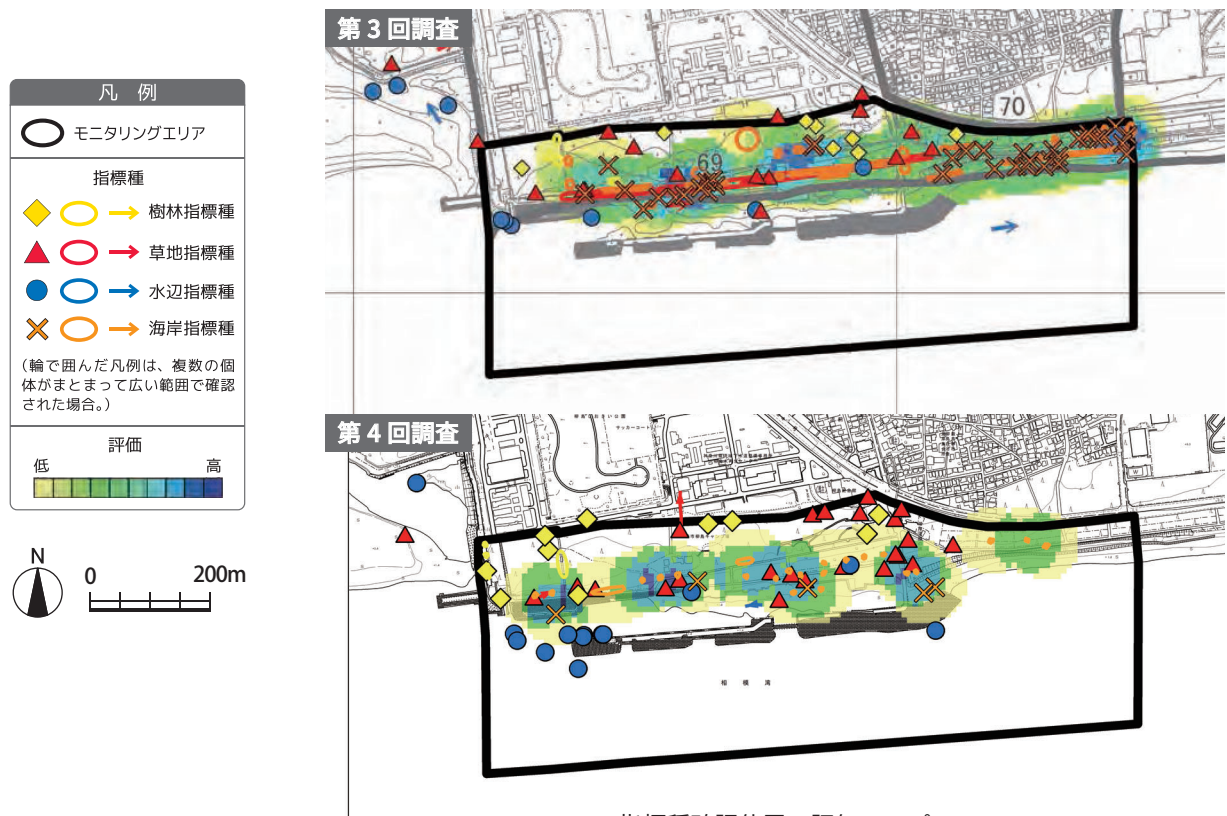
● 評価

柳島は、第3回調査時と比較して、県の養浜事業により海岸部を中心に大きく変化した調査地区です。本調査地区では、海岸浸食への対策として神奈川県による養浜事業が継続して行われていますが、海岸指標種の一部が未確認となったことについては、この事業の影響が考えられます。

植物では、第3回調査でハマエンドウやコウボウムギのまとまった群落が確認されていましたが、第4回調査ではその規模が縮小しています。また、昆虫類では、第4回調査では砂浜を生息環境とするオサムシモドキが確認されませんでした。海岸で魚類の死骸等にも集まるハマベエンマムシ類は第3回調査に引き続き確認されています。鳥類では海岸指標種であるキョウジョシギが確認されていますが、砂浜ではなく南西部における消波ブロックで確認されました。

なお、草地指標種は大幅に増加していますが、主に昆虫類の指標種が多く確認されたことによるものです。带状に分布する草地環境をバッタ類の指標種が利用しているものと考えられます。確認された指標種の増加は、生息環境の向上ではなく、調査精度の向上による可能性が高いと言えます。

砂浜の侵食対策は必要な事業ですが、第3回調査からの指標種の減少を考えると、砂浜に特有の生きものに十分配慮し、対策手法の再検討を行いながら事業を進めることが望まれます。



指標種確認位置 & 評価マップ

第4回調査で確認された指標種

海岸：オニシバ、ケカモノハシ、コウボウシバ、コウボウムギ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、キョウジョシギ、クロマメゾウムシ、ハマベエンマムシ類

樹林：ウラシマソウ、ウグイス、エナガ、クロカナブン

草地：チョウゲンボウ、ヒバリ、ホオジロ、モズ、ヒガシニホントカゲ、オナガササキリ、ジャコウアゲハ、ショウリョウバッタモドキ、スズムシ、ヒガシキリギリス、マツムシ

水辺：アオサギ、コサギ、コチドリ、ヒドリガモ、ホシハジロ、ケラ



じょうのこし
城之腰

● 城之腰ってどういうところ？

城之腰は、市北東端部に位置し、樹林と草地、果樹園や田畑等の農地が入り組み、その中に住宅地が点在する地域となっています。丘陵に谷戸が入り込んで形成された場所ですが、現在では道路造成等の開発により、もともとの地形が分からなくなっている場所も増えています。地域の多くは農地として利用されており、農地の間に草地が点在しています。また、南から農業用水路が通っており、北に位置する小出川に向かって流れています。

ツクバトリカブトやセンノキカミキリ等の樹林指標種、ツリガネニンジン、ホオジロ、シブイロカヤキリ等の草地指標種が記録された他、オモダカやオニヤンマ等の水辺指標種も確認されています。

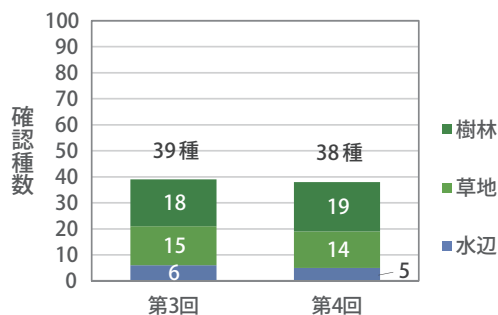
湿地や草地、樹林等、多様な環境を含むことから、城之腰は特に重要度の高い自然環境を有する地域に準ずる地域として、自然環境評価調査の調査地区に加えられています。

● 8年間でどんな変化があったの？

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を比べると、樹林・草地・水辺指標種いずれもほぼ横ばいで推移しています。

指標種が多く確認された場所の一部は果樹園として維持管理されており、人の手によって適度な管理が行われることで、多くの種の生育に適した環境が維持されているものと考えられます。

指標種の確認状況



3 調査地区の変化と評価の概要

● 評価

城之腰は、農耕地の中に、竹林や果樹園を含む小規模な樹林がモザイク状に位置している特徴的な環境を反映して、多くの指標種が確認されています。

調査範囲の北西部と南東部の、指標種が集中して確認されているエリアは、ややまとまった樹林環境です。第3回調査では樹林の周辺部や耕作地に草地指標種が確認されていましたが、第4回調査では大きく減少しており、その多くは鳥類です。

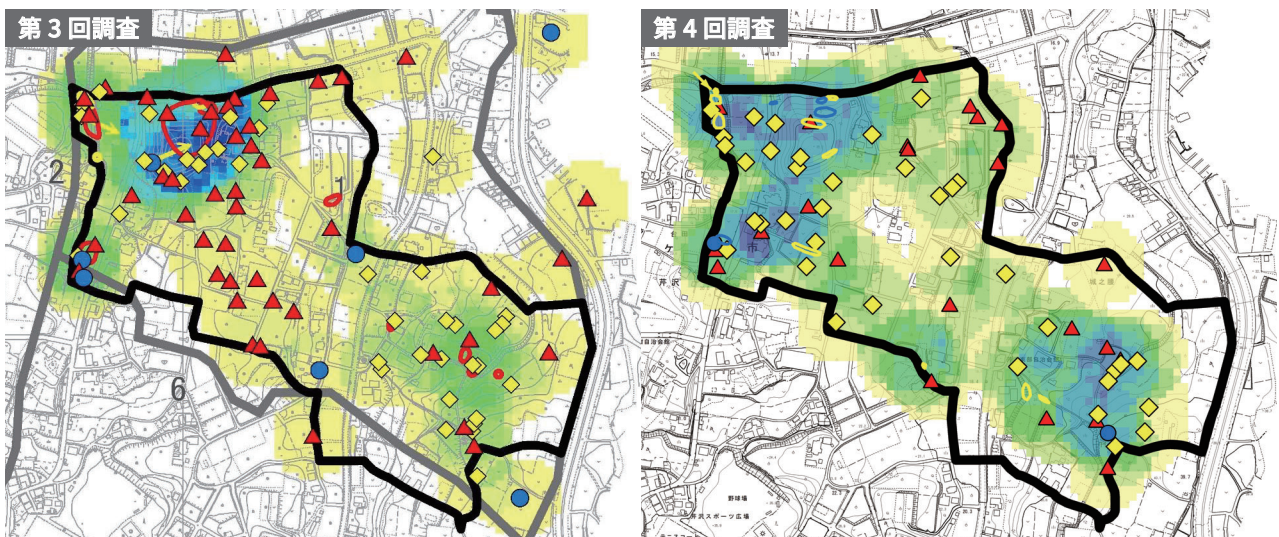
樹林指標種は、第3回調査では集中して確認されるエリアが明瞭でしたが、第4回調査ではややばらけた分布パターンになりました。これは、主にウグイスの確認によるものです。植物の確認状況からは、大きな変化は見られませんでした。

草地指標種については、鳥類の確認地点数は減少しましたが、植物ではツリガネニンジン等が多数確認された他、クサボケ等も引き続き確認されています。

一方、水辺指標種の確認地点数は第3回調査と同様、第4回調査でも少ない状況でした。休耕田・細流等の水辺環境が少なく、第1回調査で確認されていたシュレーゲルアオガエルが確認されていません。これはシュレーゲルアオガエルが産卵できる土質のあぜ道が減ったことも要因と考えられるため、水辺環境の維持だけでなく、指標種的生活史全体を考える必要があることを示しています。

現在は比較的良好な環境が残されていると評価できますが、開発の対象になりやすい立地条件から、緑地は減少傾向で楽観視はできない状況と言えます。

樹林と草地在りモザイク状に分布する環境が特徴的であることから、これらの要素を一体的に維持することが望ましいと言えます。



指標種確認位置 & 評価マップ

第4回調査で確認された指標種

樹林：アカガシ、ウラシマソウ、オオハナワラビ、カマツカ、ダイコンソウ、ツクバトリカブト、ヒトリシズカ、マルバスマシ、ヤマユリ、ウグイス、シロハラ、ヤマガラ、アズマヒキガエル、エゾカタビロオサムシ、ゴマダラチョウ、センノキカミキリ、トゲナナフシ、ヒメマイマイカブリ、ヤマトタムシ

草地：クサボケ、ツリガネニンジン、ノアザミ、フユノハナワラビ、ホタルブクロ、ワレモコウ、チョウゲンボウ、ホオジロ、モズ、オナガササキリ、キンヒバリ、シブイロカヤキリ、ショウリョウバッタモドキ、マメハンミョウ

水辺：イノモトソウ、オモダカ、チダケサシ、オニヤンマ (幼虫)、ケラ

凡 例	
	モニタリングエリア
指標種	
	樹林指標種
	草地指標種
	水辺指標種
	海岸指標種
(輪で囲んだ凡例は、複数の個体がまとめて広い範囲で確認された場合。)	
評価	
	低 高



しおみだい

汐見台

● 汐見台ってどういうところ？

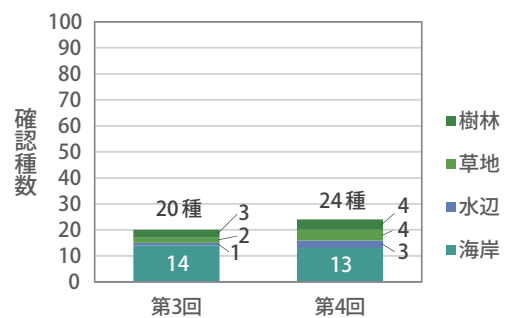
汐見台は市の南東端部、湘南海岸沿いに位置します。柳島同様に砂防林と海岸を主体とする地域で、西側にはゴルフ場が位置し、北側には海浜自然生態園が位置する等、市南部のまとまったみどりを構成しています。汐見台では、オカヒジキやクロマメゾウムシ等、海岸指標種19種のうち13種が見つかり、海岸の環境が良く保たれています。このことから、汐見台は特に重要度の高い自然環境を有する地域に準ずる地域として、自然環境評価調査の調査地区に加えられています。

● 8年間でどんな変化があったの？

第3回調査と第4回調査の指標種の確認状況を見比べると、海岸指標種の確認種数は高い水準でほぼ横ばいとなっています。また、樹林・草地・水辺指標種の確認種数が増加しています。

植栽による常緑広葉樹との混交林化が進んでいたクロマツ林の部分的な伐採や枝払い等、砂防林の維持管理が行われていますが、その他に周辺の状況で目立った変化は確認されていません。汐見台には砂地を中心とした海岸環境が比較的良好な状態で残されており、海岸指標種の生息・生育環境が安定して維持されていると考えられます。

指標種の確認状況



3 調査地区の変化と評価の概要

● 評価

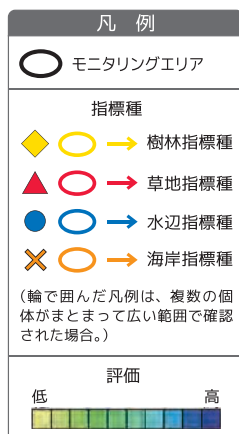
指標種の確認種数から、汐見台は大きな環境の変化はないと判断されます。クロマツ林は県によって維持管理されており、樹林・草地指標種にも大きな変化は見られません。

海岸指標種の種数はほぼ横ばい傾向ですが、柳島も含めてオサムシモドキは未確認だったため、オサムシモドキの生息環境が悪化している可能性があります。汐見台周辺は茅ヶ崎海岸の中では比較的砂浜の侵食が抑えられている場所ですが、急速に侵食が進行する場合もあるため、汀線*の変化についても注視しておくのが望ましいと言えます。

コウボウムギ、ハマヒルガオ、ハマニガナ等の海浜性植物群落は、第3回調査と同様、帯状に広く分布しています。このことから指標種が集中的に確認された地点の分布パターンも第3回調査とほぼ同様です。

汀線の位置もほとんど変化がなく、良好な砂浜が残されていることから、現時点では良好な海岸環境が維持されていると評価できますが、砂浜の過度な利用により、海岸環境の悪化が懸念されます。また、県内では海岸環境が大きく変化している場所があることから、今後もモニタリングが必要な環境だと言えます。

※汀線：波打ち際の境界線のこと。



指標種確認位置 & 評価マップ

本エリアの評価対象外である樹林、草地、水辺指標種の確認位置は参考として示している。

第4回調査で確認された指標種

海岸：イヌハギ、オカヒジキ、オニシバ、ケカモノハシ、コウボウシバ、コウボウムギ、ハマエンドウ、ハマニガナ、ハマヒルガオ、マルバアカザ、クロマメソウムシ、シロスジコガネ、ハマベエンマムシ類
 樹林：エナガ、アズマヒキガエル、クツワムシ、クロカナブン
 草地：ホオジロ、ヒガシニホントカゲ、オナガササキリ、スズムシ
 水辺：アオサギ、ダイサギ、ミサゴ

4 『茅ヶ崎市レッドリスト2017』の一部見直し

4.1 茅ヶ崎市版レッドリストの目的

茅ヶ崎市では、市域で保全していく必要のある重要な自然を「生物種」という単位から捉えて明らかにし、今後の自然環境の具体的な保全・再生策に活用していくことを目的として、平成18年度に「茅ヶ崎市版レッドデータリスト」を作成しました。

リスト作成から11年が経過した平成29年度には、その間に生物種の生息・生育状況が変化し、国や神奈川県レッドリストの改訂も行われたことから、これらを踏まえて茅ヶ崎市版レッドデータリストの改訂を行い「茅ヶ崎市レッドリスト2017」を作成しました。

「茅ヶ崎市レッドリスト2017」から8年が経過したことを受け、本リストに記載されている動植物のうち、標準和名が変更されたもの、在来種として扱われていたものが外来種であるとの判断に変更されたもの、絶滅種とされていたが近年確実な記録が得られたもの等について、見直しを行いました。

本リストにより、引き続き市域レベルの視点から重要となる種にも着目して保全・再生を図り、掲載種の個体数が回復するとともに、生息・生育箇所の増加によって絶滅のおそれなくなること、あるいは小さくなること、また、新たに絶滅のおそれがある種が掲載されないことを目指す必要があります。

4.2 レッドリストの定義

茅ヶ崎市レッドリスト2017では、次の3つのカテゴリーを用いています。

絶滅種

過去には確認されていたが、今現在（概ね10年間）確認されない種。

絶滅 危惧種

近い将来（10～20年後）絶滅が心配される種。この中には、1箇所しか確認されないもの、個体数が極端に少ないもの等も含まれる。

準絶滅 危惧種

すぐに絶滅は考えられないが、絶滅が心配される種。

茅ヶ崎市レッドリスト2017作成時に留意した事項

- 茅ヶ崎市版レッドデータリストの掲載種のほか、茅ヶ崎市で確認されている種のうち、国や神奈川県レッドリストの掲載種も検討対象としました。
- 海域を主な生息環境とする種は検討対象から除きました。
- 文献や第3回茅ヶ崎市自然環境評価調査のリーダー・サブリーダー等への聞き取り調査から、種ごとに現在及び過去（10年以上前）の分布状況を整理・比較して、カテゴリーの区分を行いました。
- 過去の記録を含め、分布状況等の記録が少なく、その種の絶滅の危険性が判断できない種は情報不足とし、このような種は本リストには含めず、情報不足の種として別途まとめました。

レッドリストの活用

- 本リストは、行政、事業者、関係団体等さまざまな主体による種の保全活動等において環境配慮を行う際に幅広く活用されることを想定しています。
- 本リスト掲載種が開発事業予定地等で確認された場合の環境配慮のあり方は、その分類群や種の特性によって異なります。（例：鳥類等、行動圏の広い分類群では、繁殖等が確認された場合、工期の変更など相応の環境配慮が必要となりますが、単に通過等が確認された場合には、必ずしも配慮を必要としない場合もあり得ます。）

4 『茅ヶ崎市レッドリスト2017』の一部見直し

4.3 茅ヶ崎市レッドリスト2017からの変更点

茅ヶ崎市レッドリスト2017から今回見直した変更点は以下の通りです。

植物のセイタカヨシ、魚類のスナゴカマツカとヒガシシマドジョウは、近年の文献や最新の分類学的知見に準拠し、和名表記を変更しました。

絶滅とされていた植物のウラジロ、タカアザミ、哺乳類のホンDIGツネ、昆虫類のクロハナムグリは、第4回調査の他近年市内で採集・撮影等の記録が得られたため、カテゴリー区分を絶滅危惧種に変更しました。

一方、鳥類のコミミズク、サシバ、は虫類のニホンイシガメ、昆虫類のタイコウチは長年市内での記録がないため、カテゴリー区分を絶滅種に変更しました。

植物のササクサ、ガンクビソウ、マヤランは、近年市内で増加傾向にあると判断されたため、レッドリストから除外しました。また、魚類のタモロコは近年の研究により、神奈川県では国内外来種の扱いとなったため、レッドリストから除外しました。



湿地環境で見られる主な鳥

(左から、コサギ、アマサギ、アオサギ、チュウサギ、カルガモ、バン、オオヨシキリ、セッカ)

4 『茅ヶ崎市レッドリスト2017』の一部見直し

茅ヶ崎市レッドリスト 2017 からの見直し後変更対照表

分類群	標準和名 (見直し後)	レッドリスト 2017の掲載和名	レッドリストカテゴリー		変更理由
			見直し後	レッドリスト 2017	
植物	ウラジロ	ウラジロ	絶滅危惧種	絶滅	第4回調査実施期間中に堤地内で生育個体が発見されたため。
	タカアザミ	タカアザミ	絶滅危惧種	絶滅	近年市内で再確認されたため。
	セイタカヨシ	セイコノヨシ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧種	神奈川県植物誌2018で標準和名が変更になったため。
	(除外)	ササクサ	—	準絶滅危惧種	近年市内で顕著に増加傾向にあるため。
	(除外)	ガンクビソウ	—	準絶滅危惧種	近年市内で増加傾向にあるため。
	(除外)	マヤラン	—	準絶滅危惧種	近年市内で増加傾向にあるため。
哺乳類	ホンドギツネ	ホンドギツネ	絶滅危惧種	絶滅	近年市内で再確認されたため。
鳥類	コミミズク	コミミズク	絶滅	絶滅危惧種	長年市内での発見報告がないため。
	サシバ	サシバ	絶滅	絶滅危惧種	長年市内での発見報告がないため。
は虫類	ニホンイシガメ	ニホンイシガメ	絶滅	情報不足	長年市内での発見報告がないため。
昆虫類	クロハナムグリ	クロハナムグリ	絶滅危惧種	絶滅	2024年、2025年に柳谷で記録されたため。
	タイコウチ	タイコウチ	絶滅	絶滅危惧種	第3回調査に引き続き第4回調査でも発見されなかったため。 なお、タイコウチの市内最後の生息地として報告されていた場所は、調査地区である行谷地内。
魚類	ヒガシシマドジョウ	シマドジョウ	絶滅種	絶滅種	シマドジョウ類は近年、分類学的な見直しが行われ、神奈川県に生息する在来種は、ヒガシシマドジョウに該当する。
	スナゴカマツカ	カマツカ	絶滅危惧種	絶滅危惧種	カマツカ類は当初1種だったが分類の見直しで3種になり、神奈川県に生息する在来種は「スナゴカマツカ」が該当するため。
	(除外)	タモロコ	—	絶滅危惧種	神奈川県では国内外来種の扱いとなったため。

：茅ヶ崎市レッドリスト 2017 を見直した箇所

4 『茅ヶ崎市レッドリスト2017』の一部見直し

4.4 茅ヶ崎市レッドリスト(見直し後)

植物

■絶滅種	アオガヤツリ、アケボノソウ、アズマツメクサ、イトハナビテンツキ、イラクサ、オオアカウキクサ、オオバクサフジ、オグルマ、オケラ、オシダ、オトコヨモギ、ガクアジサイ、カセンソウ、カモノハシ、カワラサイコ、カワラマツバ、キセワタ、クサレダマ、クジャクシダ、クマイチゴ、クモキリソウ、クロモ、ケゴンアカバナ、ゴウソ、コキツネノボタン、コバノイシカグマ、サジガクビソウ、サデクサ、シバヤナギ、スナシバ、スナビキソウ、タチモ、ツリバナ、ツルカノコソウ、トチカガミ、ナガミノオニシバ、ヌマトラノオ、ノアズキ、ハタザオ、ハチジョウススキ、ハナウド、ハナハタザオ、ハマウツボ、ハママツナ、ヒメアブラソウ、ヒメイタチシダ、ヒメコウガイゼキショウ、フシグロ、ヘラオモダカ、ミズネコノオ、ミズユキノシタ、ミノボロスゲ、ミヤマキケマン、メハジキ、ヤマズズメノヒエ、レンリソウ
■絶滅危惧種	アカショウマ、アカメヤナギ、アゼスゲ、アマナ、アリノトウグサ、イカリソウ、イチヤクソウ、イチリンソウ、イヌガンソク、イヌハギ、イワガネゼンマイ、ウツボグサ、ウラジロ、ウバミソウ、オオバノトンボソウ、オオハリイ、オオトラノオ、オドリコソウ、オニシバ、オニシバリ、オニノヤガラ、カサスゲ、カナビキソウ、カラスノゴマ、カワラナデシコ、キッコウハグマ、キヨタキシダ、クマガイソウ、コウボウ、ゴキツル、コシオガマ、コジュズスゲ、コヒロハハナヤスリ、ゴマギ、サクラタデ、サラシナショウマ、シケチシダ、シュウブンソウ、ジュウモンジシダ、セイタカヨシ、タカアザミ、タカトウダイ、タムラソウ、トウゲシバ、ナツノハナワラビ、ニオイタチツボスミレ、ニガイチゴ、ネズミガヤ、ハイヌメリ、ハナイカダ、ハマゴウ、ハマニガナ、ハマハナヤスリ、ハンノキ、ヒキヨモギ、ヒゲシバ、ヒナガヤツリ、ヒメカンスゲ、ヒメシロネ、ヒメハギ、ヒメミソハギ、ヒルムシロ、ピロードテンツキ、ヒロハイヌワラビ、ヒンジガヤツリ、フサザクラ、フユイチゴ、ホソバナライシダ、マキエハギ、マムシグサ、マルバウツギ、マルバヌスビトハギ、マルバハギ、ミサキカグマ、ミズオオバコ、ミズニラ、ミズマツバ、ムラサキニガナ、メアゼテンツキ、ヤブムグラ、ヤブレガサ、ヤマアジサイ、ヤマイ、ヤマニガナ、ヤマラッキョウ、リンドウ、ワセオバナ
■準絶滅危惧種	アオイスミレ、アカネスミレ、アカバナ、アキノキリンソウ、イヌトウバナ、ウバユリ、ウマノアシガタ、エナシヒゴクサ、オガルカヤ、オトギリソウ、ガマ、カワラケツメイ、キクモ、キンラン、ギンラン、クサネム、クララ、クロカワズスゲ、クログワイ、クロモジ、ケンポナシ、コシロネ、コスミレ、コバノカモメヅル、コマツナギ、コモチシダ、サイハイラン、ササバギンラン、シュンラン、ジロボウエンゴサク、タウコギ、タコノアシ、タツナミソウ、タニソバ、タンキリマメ、ナツトウダイ、ナンテンハギ、ナンバンギセル、ニガナ、ニシキソウ、ヌマガヤツリ、ノジスミレ、ノダケ、ハッカ、ハマカキラン、ハンゲショウ、ヒメミズワラビ、フデリンドウ、ヘビノネゴザ、ホタルカズラ、ホトトギス、ホラシノブ、ミコシガヤ、ミズガヤツリ、ミゾコウジュ、ミヤコグサ、ミヤマカンスゲ、ヤブスゲ、ヤマアワ、ヤマハタザオ、リュウノウギク

哺乳類

■絶滅種	—
■絶滅危惧種	カヤネズミ、ジネズミ、ホンドイタチ、ホンドキツネ
■準絶滅危惧種	—

鳥類

■絶滅種	コミミズク、サシバ、トラフズク
■絶滅危惧種	アオアシシギ、アオバズク、アオバト、アカアシシギ、アマサギ、ウミウ、エリマキシギ、オオソリハシシギ、オオタカ、オオヨシキリ、オバシギ、カケス、キョウジョシギ、クイナ、クサシギ、クロジ、コアジサシ、ササゴイ、サンコウチョウ、シロチドリ、セッカ、タカブシギ、タゲリ、タマシギ、チュウサギ、ツルシギ、ハイタカ、ハヤブサ、フクロウ、ミサゴ、ミユビシギ、ムナグロ、メダイチドリ、ヤブサメ、ヤマシギ
■準絶滅危惧種	アカハラ、イカルチドリ、イソシギ、ウグイス、エナガ、カイツブリ、カシラダカ、キアシシギ、キビタキ、ゴイサギ、コサギ、コシアカツバメ、コチドリ、セグロセキレイ、ダイサギ、タシギ、チュウシャクシギ、トウネン、トラツグミ、ノスリ、バン、ヒバリ、ヒメアマツバメ、ビンズイ、モズ、ヤマガラ、ヨシゴイ

両生類

■絶滅種	—
■絶滅危惧種	トウキョウダルマガエル
■準絶滅危惧種	アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンアカガエル

4 『茅ヶ崎市レッドリスト2017』の一部見直し

は虫類

■ 絶滅種	ニホンイシガメ
■ 絶滅危惧種	シロマダラ、ニホンマムシ
■ 準絶滅危惧種	シマヘビ、ヒガシニホントカゲ、ヒバカリ、ヤマカガシ

魚類

■ 絶滅種	キンブナ、ヒガシシマドジョウ、ゼニタナゴ、ミナミメダカ、ミヤコタナゴ、ヤリタナゴ
■ 絶滅危惧種	カワアナゴ、スナゴカマツカ、スミウキゴリ、ホトケドジョウ
■ 準絶滅危惧種	アブラハヤ、ニホンウナギ

昆虫類

■ 絶滅種	アオヤンマ、アサマイチモンジ、イタヤカミキリ、ウラゴマダラシジミ、オオキトンボ、オオチャバネセセリ、オオムラサキ、ガムシ、キイトトンボ、ゲンゴロウ、コオナガミズスマシ、シャープゲンゴロウモドキ、ジャノメチョウ、シルビアシジミ、セスジイトトンボ、タイコウチ、チョウトンボ、ツマグロキチョウ、ナカイケミヒメテントウ、ネグロセンプリ、ハネビロエゾトンボ、ハルゼミ、ヒゲコガネ、ヒメヒラタシデムシ、ホソカミキリ、ホソバセセリ、マエモンシデムシ、ミルンヤンマ、メスグロヒョウモン、ヤナギハムシ、ヨツボシカミキリ
■ 絶滅危惧種	イチモンジチョウ、ウスタビガ、ウバタマコメツキ、ウラナミアカシジミ、オオイトトンボ、オサムシモドキ、カトリヤンマ、キイロゲンセイ、キバネアシブトマキバサシガメ、ギンイチモンジセセリ、クマコオロギ、クルマバッタ、クロタマムシ、クロハナムグリ、クロマメゾウムシ、ゴイシシジミ、コマダラウスバカゲロウ、シオヤトンボ、シロスジカミキリ、シロスジコガネ、シロヘリツチカメムシ、ツマグロキゲンセイ、ツヤハマベエンマムシ、ナキイナゴ、ニッポンハナダカバチ、ネアカヨシヤンマ、ハラビロトンボ、ヒゲナガハナノミ、ヒメアカネ、ヒメマイマイカブリ、ヒラタクワガタ、ヘイケボタル、ホソミオツネトンボ、マダクロホシタマムシ、マツモムシ、マメハンミョウ、マユタテアカネ、ミイデラゴミムシ、ミヤマアカネ、ムツボシタマムシ、ムネアカセンチュウコガネ、モノサシトンボ、ヤマクダマキモドキ、ヤマトアオドウガネ、ヤマトケシマゴソコガネ、ヨコヅナツチカメムシ、ヨツボシゴミムシ、ヨツボシモンシデムシ、ルリエンマムシ
■ 準絶滅危惧種	ウバタマムシ、エゾカタビロオサムシ、オオアメンボ、オオミドリシジミ、オナガササキリ、オニヤンマ、カントク、キイロトラカミキリ、クスベニカミキリ、クツワムシ、クマスズムシ、クロイトトンボ、クロスジコバネササキリモドキ、ケラ、コカブトムシ、コバネササキリ、コフキトンボ、シマアメンボ、ショウリョウバッタモドキ、シラホシナガタマムシ、スズムシ、ツノトンボ、トゲナナフシ、ナツアカネ、ヒオドシチョウ、ヒガシキリギリス、ヒメクサキリ、ホタルトビケラ、マツムシ、ミドリカミキリ、ヤトセスジジョウカイ、ヤマトタマムシ、ヨツスジハナカミキリ

甲殻類

■ 絶滅種	—
■ 絶滅危惧種	アカテガニ、ヒラテテナガエビ
■ 準絶滅危惧種	サワガニ

貝類

■ 絶滅種	ドブガイ、マシジミ、ヤマトシジミ
■ 絶滅危惧種	ドブシジミ、マルタニシ、モノアラガイ
■ 準絶滅危惧種	カワニナ



サシバ

5 まとめ

5.1 第4回調査からみえてきたこと

第4回調査では、第3回調査と同様に市内9地区を対象に、谷戸・湿地・草地・樹林・海岸等に生息・生育する指標種について調査を実施しました。

谷戸環境の見られる柳谷、行谷、清水谷、赤羽根十三図では、湧水や湿地、草地、樹林が一体となって残されており、全体的には今回も多く樹林・草地・水辺指標種が確認されました。これらの地域は、市民団体による湿地管理等が継続的に行われている場所があり、こうした活動が環境の維持に寄与している可能性が示されました。しかしながら、柳谷、清水谷では草地指標種と水辺指標種が大きく減少しています。これらが生息・生育する環境の変化について、保全方法の改善を検討する等、留意が必要です。

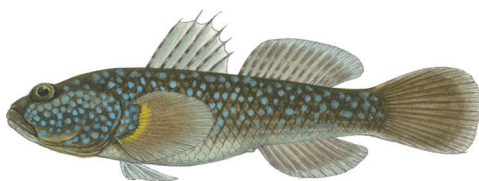
行谷の小出川沿いでは、遊水地造成に伴って氾濫原の環境に変化が見られるものの、工事が本格化していないこと、また、工事関係者以外が立入できない環境になったことで、一時的に生きものの生息・生育地としては良い環境になっています。しかし、遊水地の造成工事の本格化に伴い、氾濫原の環境は大きく変化する見込みのため、自然環境の保全・再生に向けた取組が必要です。なお、谷戸側では管理が継続されていることで全体としては良好な状態が保たれています。

城之腰では、農地や草地、果樹園、樹林が入り組んだ環境が見られ、樹林・草地・水辺の指標種が比較的多く確認されました。調査地区の一部では人の手による適度な管理が行われることによって、多様な生きものの生息・生育環境の確保につながっていると考えられます。

一方で、長谷では、これまで特徴的であった貧栄養の草地が造成工事により失われたことで、確認された指標種数が大きく減少しました。特に、市内でもほほここでしか見られなかった草地指標種が確認されず、人為的な環境変化が生物相に及ぼす影響が明確に表れた結果となりました。

柳島や汐見台では、海浜植物やクロマツ林が維持されており、海岸指標種の多くが引き続き確認されました。柳島では海岸指標種がやや減少し、海岸保全事業の影響に注視が必要です。汐見台では、砂浜環境が比較的良好な状態で維持されており、海岸指標種が安定して生息・生育していることが分かりました。

第4回調査を通じて、市内の自然環境には良好な状態が維持されている地域がある一方で、管理状況に伴い自然環境の劣化が起きた可能性のある地域、土地利用の変化等により従来の自然環境が失われた地域、これから自然環境が大きく変化しつつある地域も確認されました。今後も各地域の特性を踏まえ、適切な保全と継続的な維持・管理を進めていくことが重要です。



ヌマチチブ



カヤネズミ

5.2 第4回調査結果をふまえた今後の活用

(1) 自然環境にかかわる計画・政策への反映

- ・「茅ヶ崎市みどりの基本計画 生物多様性ちがさき戦略」改定への反映

令和11年度に改定予定の「茅ヶ崎市みどりの基本計画 生物多様性ちがさき戦略」において、市のみどりの現状を示す基礎資料として、第4回調査結果を用い、保全すべきコアマップ対象地区の見直し等、みどりの保全・再生に向けた取り組みを推進していきます。また「みどりの基本計画 生物多様性ちがさき戦略」の他、関連する計画である「茅ヶ崎市環境基本計画」では、指標種の確認種数を計画の進捗を計る政策指標として位置付けており、市の自然環境の変化を示す指標として第4回調査結果を活用します。

- ・市民との協働による管理推進の継続

今回の調査で浮かび上がった各地区の状況、そして課題の解決や生物多様性の保全・再生に向けた環境維持を続けていくため、市民へ第4回調査結果の情報提供を広く行います。

(2) 保全対象地域におけるさまざまな取り組み

- ・新たな特別緑地保全地区やみどりの保全地区への指定や拡大に向けた検討

行谷では、これまでの自然環境評価調査の結果に加え、第4回調査結果においても、樹林・湿地等が一体となった谷戸地形の中で多様な生きものが生息・生育していることがわかりました。過去の調査結果から提案されてきた特別緑地保全地区の指定、また、みどりの保全地区を活用した一体的な保全について、他の法令（「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」等）との関係性も含め、検討を続けます。

- ・特別緑地保全地区（清水谷、赤羽根字十三区周辺）の保全活動の検討

2つの特別緑地保全地区（清水谷、赤羽根字十三区周辺）について、第4回調査結果をこれまでの保全活動の振り返りや、今後の活動内容の検討資料として活用します。また、必要に応じて保全管理計画への反映について検討します。

- ・多様な主体との連携（柳谷、長谷、平太夫新田、柳島、汐見台）

管理主体が国や県等、市ではない調査地区について、管理者に第4回調査結果を共有します。

また、各地の管理方法について配慮を申し入れる等、課題のある状況の改善や、自然環境の維持に繋げるための協議を行います。

(3) レッドリストの活用による種の保全

- ・茅ヶ崎市レッドリスト2017の一部改訂を行ったことを周知し、生物多様性保全のための啓発資料として活用します。また、土地利用等が行われる際の保全配慮資料として活用し、保全・再生を図る取り組みを推進します。
- ・掲載種の現状把握のため、積極的な情報収集に努めます。

5 まとめ

5.3 第5回自然環境評価調査に向けて

(1)自然環境評価調査の継続

- ・自然環境は都市化の進行等の人的影響だけでなく、時間と共に変化していくものです。自然環境の保全や再生を行うためには、保全すべき自然環境の最新の状態を把握することが重要です。市の自然環境の変化を誰にでも理解できるように可視化し、自然環境保全施策を推進する基礎資料を得るため、自然環境評価調査を継続していきます。
- ・市の自然環境の変化を経年的に把握するために、この調査の必要性・重要性について発信を続けていきます。

(2)レッドリストの改訂

- ・時間の経過に伴い、市内の生き物の生息・生育状況も変化しているため、第5回調査で茅ヶ崎市レッドリスト2017の全面改訂を検討します。

(3)特定外来生物の情報について

- ・現在、市内の外来種の分布状況や侵入情報は一元化されておらず、実態がよく分かっていないものもあります。第3回調査の際は、指標種調査と並行して特定外来生物の生息・生育状況の記録を行い、第4回調査では水域で近年問題となっているナガエツルノゲイトウの生育状況を記録しました。
特定外来生物は爆発的に増加するものが多く、侵入の初期段階で対策を講じることが有効であるため、侵入状況を把握することは外来種対策を行う上で大切なデータとなります。そのため、随時情報を収集し、更なる対策の実施を目指します。

(4)評価調査の担い手の育成・確保

- ・調査員養成講座を継続して実施するとともに、自然環境保全関連講座等の情報をイベントやSNS等の情報発信媒体を活用し、情報提供を行います。
- ・調査参加経験のある市民に対するスキルアップの機会をどのように提供するか検討し、試験的な取組の実施を目指します。
- ・小中学校と連携し、自然環境調査に繋がる活動への参加を検討します。



ホタルブクロ

6 調査協力一覧

学識経験者・有識者（敬称略）

学識経験者	小池文人（横浜国立大学 名誉教授）
考察作成	岸一弘、竹野浩一（サンコーコンサルタント株式会社）

チームメンバー（50音順、敬称略）

植物チーム	リーダー	岸しげみ
	サブリーダー	岸一弘、小島仁志、小室静子、本原裕文
	メンバー	荒居浩明、安西美恵、伊藤大輔、井上泰夫、倉金榮、金子和、串間好子、塩原香澄、鈴木和美、鈴木悟、鈴木惺也、宗建、中村園、西原真樹、野田克己、野田瑞江、林浩、平野航基、藤澤修一、前田照勝、松尾潤一、三澤共香、宮脇美由貴、森一枝
哺乳類チーム	リーダー	小林隆義
	メンバー	櫻井香苗、木下茂、柴田多満美、マット・トライヴォー、吉村良介・トライヴォー
鳥類チーム	リーダー	白田仁志
	サブリーダー	鳶田靖忠、田中明美
	メンバー	伊沢和子、石渡洋一、稲葉小百合、植田武志、海野誠、大重律子、櫻井香苗、木下茂、斎藤和子、笹岡朋子、鈴木和昌、祖一光男、館山孝子、田中基彌、田辺啓子、土橋紀子、濱本好美、マット・トライヴォー、横山勝子、吉村良介・トライヴォー、渡辺俊子
両生・は虫類チーム	リーダー	八城敬友
	サブリーダー	福正隼士、福正真士
	メンバー	遠藤聖弥、遠藤麻衣子、大西快斗、大西裕太、清水さつき、清水つぐみ、廣田幸子、福正しのぶ、森井大二郎、森井弥生
昆虫類チーム	リーダー	岸一弘
	サブリーダー	岸本道明、露木和男、細川将洋
	メンバー	荒居浩明、板橋哲、板橋磨将、海老原旬、小此木宣夫、倉川典夫、古賀源、小久保然、小谷和男、鈴木和真、鈴木恵太、鈴木貴弘、鈴木春奈、遠山賢司、長谷川純太、長谷川聡太、長谷川真弓、平石廣、藤澤修一、細川千理、堀田佳之介、増淵雅樹、増淵悠、三上健、三上晟、三上希、三上諒、三嶋憲太、矢川憲、山口英雄、渡邊祥子
魚類等チーム	リーダー	木村喜芳
	サブリーダー	柴田多満美
	メンバー	小林隆義、齋藤和久、坂巻徳和、附田和美、附田宙也、附田岳大、附田康宏、長久修三、西方文夫、平岩宏司、平田稔

調査協力：佐藤祐治、宮田昌之、三輪徳子、山川美都子、和田一郎

NPO 法人海岸づくり推進機構（金子和、伊藤美保、太田仁、久保田恵子、山口順平、和田高信）

イラスト：森上義孝

企業版ふるさと納税寄付企業：

株式会社新和商会、戸田建設株式会社、株式会社サンジウナナド



モクスガニ



第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査 概要報告

2025

令和8年（2026年）3月発行 600部作成

発行
編集

茅ヶ崎市
都市部景観みどり課
〒243-8686 神奈川県茅ヶ崎市茅ヶ崎一丁目1番1号
電話：0467-82-1111（代表）
FAX：0467-57-8377
<https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/>

ホームページ





第4回茅ヶ崎市自然環境評価調査 概要報告

2025

